中央分離帯

usk

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
中央分離帯

【Ｎコード】
Ｎ４８２７Ｗ

【作者名】
ｕｓｋ

【あらすじ】
オフィスパレットシリーズ
山田啓輔と初芝聡美のお話。
今時珍しいくらい真面目で誠実な啓輔と、仕事に生き、長いこと恋愛と遠ざかっていた聡美のスローな恋の行方は

プロローグ　聡美と啓輔（前書き）

啓輔と聡美のお話。

プロローグ　聡美と啓輔

聡美　？

最近啓輔の様子がおかしい。
仕事はちゃんとしてるけど、妙にソワソワしたり、不意に携帯をかけてみたり、帰りなんていつも知美と一緒に帰る。
知美とたまたま同じアパートに住んでることは知ってるけど、一緒に帰る必要なんてないはず。時にはどっちかの仕事が終わるまで待っている始末だ。まるで付き合ってるみたいじゃないか。

去年の暮れにあたしから伝えて、あたし達は付き合いだした。伝える時も歳の差には少なからず抵抗はあったし、付き合ってからも、ホントにあたしでいいのかな。もっと歳が近くてかわいい子の方がいいんじゃないかな。その思いはどうしても拭うことはできない。だって八歳もあたしの方が年上だから。
そのことを口にすると、啓輔は決まって「俺は聡美さんが好きなんだよ。」と言ってくれる。そのことに安心してる自分もいる。

今日も啓輔は知美と一緒に帰った。
「お疲れ様。後で電話するね。」と帰り際に笑顔をくれた。
ホントに信じていいの？ホントにあたしのこと好きなの？
訊きたい気持ちをぐっと堪える。
「お疲れ様。気をつけて帰ってね。」
あたしの口からは室長としての言葉が出る。意識すればいつだっ

て頼れる室長を演じることができる。
でもきっと電話がかかってきたら今日も訊いてしまう。
「ホントにあたしでいいの？」
啓輔はどうこたえてくれるのだろう。

啓輔　？

最近聡美さんの様子がおかしい。
仕事はちゃんとしてるけど、妙にソワソワしたり、不意にボーっとしてみたり、帰り際に声をかけると、いつも室長としての顔をのぞかせる。
理由はなんとなく解っていた。俺が篠原さんと一緒にいるからだ。

先日、篠原さんの大学の先輩だった、三浦さんに会った。どうして俺に会わせるのか解らないまま食事に誘われたのだが、会ってみて理由が解った。
篠原さんが別れた彼氏からストーカー行為を受けている、と相談された。
「同じアパートに住んでる山田さんなら、適任なんです。」と篠原さんの警護を頼まれた。
当然、同じオフィスで働く仲間を放っておくことはできず、引き受けることにした。その際、ちゃんと聡美さんにも話をするように言ったのだけど、篠原さんと三浦さんは頑として受け付けなかった。だから俺もそのことを隠す必要があった。

たぶん疑われてるんだろうと思った。そう思うと胸が痛くなる。
聡美さんは時々突発的に不安に襲われたように「あたしのこと好

き？」とか「ホントにあたしでいいの？」とか訊くことがあった。
その度に俺は「俺が好きなのは聡美さんだけだよ。」といつでも、
どんな時でも伝えてきた。俺には聡美さん以外いないから。

「お疲れ様、後で電話するね。」と帰り際に笑顔を見せる。俺の笑顔は聡美さんだけに向けられる。
聡美さんは、一瞬ちらっと篠原さんを見て
「お疲れ様。気をつけて帰ってね。」といつものように室長の顔を見せた。
胸が痛い。どうして笑顔を見せてくれないのか。俺はこんなに好きなのに。

聡美　？

啓輔からの電話は、夜の２２時以降と決まっている。お互い家に帰ってからもやることあるから、それを全部終わらせてから、ゆっくり話そう。というのがお互いの決めたルールだった。

だから、それまでに全てを終わらせるのが、あたしの最近の日課になっていた。どんなに遅く帰宅しても、２２時までにお風呂を済ませて、一日酷使したお肌の手入れを必ず行う。キレイな肌だね、とほめてくれる啓輔の為にも、それだけは絶対に欠かすことはできない。

そして、今日も全てを終わらせて携帯をテーブルに置き、ソファに座って電話を待っている。長年仕事に生きてきて、恋することを忘れていた自分が、恋人からの電話を待っているという事実に初めは、気恥ずかしさやら、嬉しさやら、子供っぽいトキメキやらで気が気ではなかったけど、それが当たり前になってくると気恥ずかしさは消えて、代わりに不安が襲うようになった。ホントにかかってくるのだろうか？携帯を前にして時間が経てば経つほど不安は強くなり、その度にかかってきた電話に飛びついた。啓輔の優しい声を聞いて電話口で泣きそうになることもしばしばあった。

時計の針が焦らすようにカチカチと音を立てて進んでいく。５分、１０分待っても携帯は鳴らなかった。

とたんにまた不安が襲ってくる。今日も知美と一緒に帰ったとい

う事実が小さな疑惑となって心を針でつつく。誰が見ても、啓輔とあたしよりは、啓輔と知美の方がお似合いだろう。なにせ知美とは二歳しか違わないのだから。

自分に自信が持てない。早く鳴れ、と携帯を見る。啓輔の声が聞きたかった。

「遅くなってごめんね。」と啓輔が言う。

「ううん、大丈夫だよ。」とあたしは答える。

それだけで不安は解消される。

早く鳴れ、携帯。

時計と携帯を交互に睨む。２２時２０分。まだ鳴らない。

待っている時間はどうして長く感じるんだろう。２２時２４分。まだ鳴らない。

そのうちにあきらめが顔をのぞかせる。今日はきっと急に用事が出来てしまったんだ。それで電話できなくなってしまったんだ。と自分に言い聞かせる一方で、どうしても知美のことが頭から離れない。

何か隠してない？

訊きたいけど訊けない。

「ごめん。本当は・・・。」なんて聞きたくない。信じたい気持ちと、疑惑で板挟みだ。

２２時３６分。今日はもう鳴らないのだろうと、寝室へ向かう。

ほんの少しの期待を残して、携帯を持って。

手の中で携帯が鳴った。寝室のドアを開ける直前だった。慌てて

携帯を開く。

「もしもし？」

「ああ、聡美さん。遅くなってごめんね。」

啓輔の優しい声が携帯越しに聞こえて泣きそうになる。

「ううん、大丈夫。そんなに待ってないから。」

どうして遅くなったの？質問を空気と一緒に肺の奥へと吸い込んだ。

啓輔はいつも通りの声で話をする。今時珍しいくらい真面目で誠実なのは出会った頃から知ってる。でもその誠実な心が自分に向いているのか自信がない。だからまた、あたしは訊いてしまう。

「ねぇ、啓輔。」

「うん？何？」

「あたしのこと、好き？」

「もちろんだよ。俺が好きなのは聡美さんだけだよ。」

啓輔は一瞬も迷うことなく答える。それだけであたしの心は潤って満たされる。

信じていいんだよね。

「うん。あたしも好きだよ。啓輔。」

聡美　？（後書き）

聡美と啓輔交互に書いていきます

啓輔　？

今日も何事なく家に帰れそうだ。
「篠原の元彼がどこで狙ってるか解らないんで、くれぐれも気をつけて。」と三浦さんは念を押したが、今のところストーカーと思われる人物が現れる気配はなかった。
駅のホームからアパートへの道を歩きながら何とはなしに周りを見渡す。
「いつもわたしと一緒にいて、聡美さんに何か言われません？」
ただ黙って歩くことに飽きたのか、篠原さんは口を開いたと思ったら、そんなことを訊ねてきた。
「何かって？」
「え？それは・・・その、嫉妬、的な？」と篠原さんは自分で言ったにも関わらず言いにくそうに目をそらした。
「毎日話はするけど、そういうことは何も言わないぁ。」
「ちゃんと、フォローした方がいいですよ。女の子はすぐ不安になるんですからね。」
「そう思うんなら、ちゃんと聡美さんに説明してよ。」

アパートが視界に入ると、同時に怪しい人物が目に入った。とっさに篠原さんの歩みを止める。
怪しい人物は木陰に隠れるようにして、アパートを伺っているように見えた。顔を上にあげて、視線は2階の方に向いているような気がする。
「あれって、篠原さんの元彼？」
「解りません・・・暗いし、遠いし。」
確かにこの距離では顔の判別はおろか、年齢の特定も難しい。と

はいえ怪しい人物がうろついている限り、このままアパートに帰るのは危険に思えた。
「・・・どこかで時間をつぶそうか？」
「いいんですか？・・・時間。」と篠原さんは時計を指差した。
とっさに腕時計を見る。時刻は夜の２１時になろうとしていた。
「うん。あまり遅くならなければ大丈夫だよ。」
聡美さんに電話するのは決まって２２時以降だ。少しくらいの余裕はある。

近くのファミレスで時間をつぶす。ちょうどお腹も空いていたし、ここで夕食を済ませることにした。
「聡美さんと付き合ってどれくらいなんですか？」
屈託のない笑顔で篠原さんが訊ねる。
「ちゃんと付き合いだしてからは、まだ半年くらいだよ。」

俺と聡美さんが付き合っていることはオフィス内では周知の事実ってやつだ。去年の暮れに聡美さんの方から想いを伝えられて、今年の春に俺の方から正式に申し込んだ。女性から想いを告白されることも、自分からちゃんと伝えることも、なにより女性と付き合うこと自体が初めてで、何も解らないまま手探りで進んできた半年だった。

恋愛をカードゲームに例えるとするなら、今まで恋愛を経験したことのない俺が持っているカードは一枚だけだった。
好き。というカード。

他にカードがない以上、どんな時でもそのカードを使うしかなくて、いつもワンパターンになってしまう。

飽きられないかな？
バリエーションの少ない男でつまらなくないかな？
その思いはどうしても拭うことはできない。嫌われたくないという思いが強くて、逆に重くないだろうか、といつも思う。

「いいなぁ、聡美さん。」篠原さんはホットサンドをつまみながら、羨ましい。と言った。
「何が？」
「だって、先輩優しいから。先輩みたいな人と恋人になれたら、絶対幸せですよ。」

幸せでいてくれたらどんなに良いだろう。でもどうしても不安になってしまう。俺は幸せだよ。聡美さんはどう？

アパートに戻ると、怪しい人物はいなくなっていた。

「じゃあ、先輩。おやすみなさい。」挨拶をして篠原さんは隣の部屋へと入って行った。
６畳ワンルームのアパートの隣に住んでるのが篠原さんだと知った時は驚いた。同じオフィスで働く仲間が同じアパートの隣に住んでるなんて、世間は狭いとは言うけど、狭すぎだろう、と思わず笑ってしまったほどだ。

部屋に入ると、真っ先に携帯を取り出した。時計を見てずいぶん遅くなってしまったと、焦りが生じる。時刻は２２時３６分を指していた。１時間ほど時間をつぶすつもりが、篠原さんの話が止まらないおかげで、少し長居してしまった。

「もしもし？」短いコールの後、すぐに聡美さんの声が聞こえた。
待っていたのかな。と申し訳ない気持ちになる。
「ああ、聡美さん。遅くなってごめんね。」
「ううん、大丈夫。そんなに待ってないから。」
聡美さんの明るい声にホッとする。

どんなときも、聡美さんと話しているだけで落ち着く。それは会話じゃなくて、メールでも同じだ。
俺のことを忘れてない。それだけで嬉しかった。だから聡美さんが突然不安そうに「ねぇ、啓輔。」と呼んだ時も俺は1ミリだって迷わなかった。
「うん？何？」
「あたしのこと、好き？」
「もちろんだよ。俺が好きなのは聡美さんだけだよ。」
俺がどんなに聡美さんを好きなのか。この一言でちゃんと伝わっているんだろうか。

聡美さんは、ほんの少し間をおいて「うん。」と小さく呟いた。
「うん。あたしも好きだよ。啓輔。」

啓輔　？（後書き）

なるべく間があかないように
載せていきます

聡美　？

仕事中。啓輔のデスクに目がとまる。そこに啓輔の姿はない。向かい合うように置いてある知美のデスクにも主の姿はなかった。
知美に入った大口の依頼にサポートして啓輔をつけたからだ。オフィスの為、何より依頼人の為、個人的な感情を挟むことはできない。経験の浅い知美のサポートには啓輔が適任だった。

「俺でよければ。」と啓輔は快く引き受けた。

室長としては正しい判断をしたつもり。でも本音を言えば、少しくらいは躊躇して欲しかった。
「ホントに俺でいいの？」と言ってくれればこんなに気に病むこともなかったのかな、と少し思う。まぁ、言ったら言ったで怒っただろうけど。「室長命令！」と。

「おい、聡美。聞いてんのか？」
急に呼ばれて我に帰る。どうやらボーっとしてたらしい。顔を上げると拓実が怪訝な顔であたしを睨んでいた。
「ん？どした？」
「どうしたじゃねぇよ。ボーっとしやがって。今度のイベントのレイアウト。イメージ作ったって言ってんの。」
「ああ、あれね。」
「お前、最近おかしいぞ。何かあったのか？」
拓実はあたしの顔を覗き込むように、顔を近づける。あわてて取り繕う。拓実は人のちょっとした変化によく気付く。それに助けら

れることもあるけど、今は気付かれたくはない。
「何でもないよ。そんなことより、出来たんでしょ？見せて。」
ダメだ。しっかりしないと。

依頼人との打ち合わせを終えて啓輔が帰ってくる。知美はすぐにあたしの所へ来て、報告をした。
彼女は去年一人抜けた為に、今年の春採用した新人だけど、仕事を覚えるのは早いし、センスあるし、お客さんの受けもいい。人材としてはとても優秀で、申し分ない。何より可愛くて性格もいい。男がこんな子を放っておくわけがないと、女のあたしでも思う。

きっと嫉妬してるんだ。啓輔の気がホントに知美に向いてしまうんじゃないかと、そればかりが心配だった。
最近啓輔と二人で過ごす時間が全然とれないのも原因の一つだと思う。

「じゃあ、今日はもう帰るね。」
啓輔はまた、笑顔だけ見せて帰ってしまう。知美が申し訳なさそうな顔でコチラを見てるのが妙に目についた。

はぁ、と深いため息をつくと、じっと見つめる拓実と目があった。慌てて仕事に取り掛かる。気付かれたかな、と書類に目を通すふりをしてちらりと伺うと、拓実は何事もなくパソコンに向かっていた。危ない、危ない。

みんな啓輔が悪いんだ。と責任を押し付ける。
全然デートに誘ってくれないのが悪い。
全然話しかけてくれないのが悪い。
たとえ5分でも10分でも一緒に居られれば少しは落ち着くのに。

そう考えると腹が立ってきた。バカケースケ。電話だけで満足できるわけねーだろ。

啓輔　？

朝、玄関を開けて廊下に出ると、まだ微かにペンキの匂いがする。隣の玄関の真新しい緑色が朝日に照らされて、嫌に鮮やかだ。俺と篠原さんと三浦さんの3人で塗り替えたドア。それは一昨日の出来事だった。

その日も、いつものように新聞を取りに外に出た。出た瞬間にペンキの臭いが鼻についた。臭いのもとをたどると、俺の目は異様な光景を捕えた。

篠原さんの部屋のドアが、赤いペンキで落書きされていた。それもただの落書きではなく、恨みの言葉とも取れる文字だった。そんなものを見てしまったのだから、半信半疑だった俺も、篠原さんがストーカーにあっている事を認めざるを得ない。この事件が解決するまでは、篠原さんの警護を怠ることもできなかった。

「大丈夫ですか？」篠原さんが覗きこむようにして、心配そうな顔を向ける。

依頼人との打ち合わせを終えて、オフィスに帰る電車の中でボーっとしていたようだ。

「あ、変な顔してた？」

「いえ、そういうわけじゃ。なんか元気なさそうだったんで。」

「そう？大丈夫だよ。」と言って、背筋を伸ばす。昔から何かを考えてる時に背中を丸める癖が抜けなくて、よく周りから心配された。どうやら具合が悪く見えるらしい。

「ちょっと疲れてるのかもね。」と笑って見せると、篠原さんは顔を曇らせて、「ごめんなさい。」と零した。
「わたしのせいですよね。先輩まで巻き込んじゃって。」
「違う、違う。」慌てて訂正する。「篠原さんは関係ないよ。ホラ、最近あんまり休みとれてないからさ。」
今年は夏から依頼が集中して、毎年仕事が減ってくる秋になっても、予約が残っていた。その為ここ2カ月余りほとんど休みが取れていない。
「仕事が多いのは嬉しいけどさ、やっぱり休みはある程度欲しいよね。」
「先輩大人気ですもんね。」そう言うと、篠原さんは一瞬はにかんだ後、思い出したように、あ。と表情を変えた。「休みが取れてないって、じゃあ聡美さんとは会ってないんですか？」
「ん？会ってるじゃん、毎日。」
「じゃなくて、仕事以外で、ですよ。」
「ああ、そうだね・・・。」
それは俺としても胸が痛いところだった。最後にデートしたのがちょうど2か月前でそれ以降ほとんど二人の時間は取れていない。ようやく自分の仕事がひと段落して、やっと聡美さんとの時間も取れると思っていた矢先に、今回の篠原さんのサポートの話が来た。
「ごめん、知美のサポートに着いてくれない？」と聡美さんに手を合わせられたら、嫌、とは言えないだろう。
「ダメですよ。女の子を放っておいたら。女の子はみんな寂しがり屋なんですから。」
「聡美さんはそんなに弱くないよ。」
「いいえ。先輩は女の子を解ってません。」
篠原さんは腕を組み、眉根を寄せてじっと睨む。俺はその視線にたじろぐしかない。

女の子を解ってないといわれると弱い。まさにその通りだからだ。
「近いうちに誘わなきゃダメです。」
「解ったよ。心配してくれてありがとう。」
社内に車掌の声が響く。もうすぐ降りる駅に到着するらしい。この話を終わらせるいいタイミングだった。
「ホラ、もう着くよ。」と、勢いよく立ちあがる。「さぁ、帰ろう。」

「で？」
「で？って、何。」
「何？じゃねぇよ。どうしたんだって訊いてんだろうが。」

やっぱり気付かれてた。
帰り際、ビルを出たところで待ち構えていた拓実に捕まったあたしは、拓実の行きつけのバーに半ば無理やり連れてこられて、至近距離で鋭い眼光を受けている。そんなに見られると目のやり場に困るんですけど、と視線をそらすと、カウンターの奥でグラスを拭いていたマスターと目が合って余計に気まずくなった。

「あんなに解りやすくため息ついて、気付かない訳ないだろうが。」
「いや、それは・・・。」
言葉に詰まる。拓実は啓輔の親友と言っても過言じゃないし、子供の頃からの付き合いなので距離が近すぎる。啓輔のことで悩んでる。なんて言ったらどうなる事やら。

「大体お前らしくねぇンだよ。」拓実はグラスに残ったウィスキーを一気に流し込んで指を向けた。
「お前が何で悩んでんのか、おおよその予想はつく。」
グイグイと近づけられる指先にドキリと心臓が鳴った。男にしては嫌に感の良い奴だ、と指を払って「なんの事？」と白を切る。
「啓輔だけじゃなくて、まさかお前も恋愛下手だとは思わなかったよ。お前歳いくつだよ。」

三十三。と素直に答えそうになって言葉を濁す。人が気にしてることを堂々と訊くな。
「お前も知ってるだろうけど、啓輔は恋愛経験が一切ないんだよ。お前がリードしてやらなくちゃあいつと付き合うなんて無理だぞ。」

拓実の言葉に、不意に啓輔が自分の過去を打ち明けてくれた時のことを思い出す。

『俺、子供の頃から女の子が怖くて、高校出るまで女の子と喋ったことなんて数えるほどしかないんです。』

蒸し暑い夏の夜に、そう言って自嘲気味に笑った顔はあたしの頭に張り付いて、何とかしてあげたいと思った。
今にして思えばあの頃から好きだったんだよなぁ。街灯に照らされた啓輔の顔は少し影がかかって、少し見惚れてしまった。だってすごく可愛かったんだもん。

「なに急にニヤついてやがる。気持ちわりぃな。」
おっと、考えが顔に出ていたらしい。
「そんなこと拓実には関係ないでしょ。」と睨み返してみる。啓輔のことを思い出してニヤついていたとは口が裂けても言えるわけがない。
「お前ら見てるともどかしいんだよな。お互いもっと言いたいこととか、やりたいこととか、あるんだろ？もっと自分からガッと行けばいいんだよ。」
「何よ。ガッて。」
「男と女でやることと言えば一つしかねえだろ。」と真面目な顔でその先を言おうとする拓実を殴って止める。「何しやがる」と口をとがらせる拓実を今度は本気で鋭く睨んで「啓輔をお前と一緒にするな。」と釘を刺した。

「お前ら付き合いだしてもう半年以上経つだろ？」と殴られた頭をさすりながら拓実はなおも続ける。
「それでやってないなんて、あり得ねぇだろ。中学生か。」
「ゆっくり行きたいんだよ。あたしたちは。」
「言っとくけどな、待っててもあいつからは絶対来ねえからな。やりたかったら自分から行け。」
それはあたしとしても考える部分でもあった。この半年間で何度か、良い雰囲気になったこともあったし、その都度あたしはいつでも求められてもいいように心に決めていたのだけど、啓輔は一度としてあたしの体を求めてはこなかった。あたしに魅力がないのかな、と思うこともあったけど、啓輔と重ねる唇からは強い愛情をいつも感じていたし、まだきっと時期じゃないんだと思うことにしていた。
「お前はいつまでも待っていられる歳じゃねぇだろ。」とあごを手で支えながら吐き捨てるように呟いた拓実のすねを思い切り蹴ってやる。「一言多いんだよ。」と、すねを押さえて悶える拓実を冷たく一瞥して。「何か作ってください。」とマスターに笑顔で注文する。
「かしこまりました。」と渋い声を出すマスターは歳の頃は四十代半ばくらいだろうか。
精錬された立ち居振る舞いが醸し出す大人の雰囲気に、さっきまで子供みたいな会話をしていたことが恥ずかしくなってしまった。
慣れた手つきで数種類のお酒を入れたシェーカーをリズム良く振りながらマスターは「いいですね。」と父親のような、暖かな眼差しを向けた。
「失礼だとは思ったんですが、先ほどのお話聞こえてしまいまして。」と白い歯を見せる。

「純粋な恋愛なんて子供の頃に忘れてきてしまって、大人の付き合いと称して体だけの関係を潔しとする方も多いなか、あなたの彼氏さんはあなたのことを本当に大事に想ってらっしゃるんでしょう。」

小さめのカクテルグラスを棚から取り出し、シェーカーの蓋を開けると、淡いピンク色の液体をゆっくりと注ぐ。

「今時珍しいくらい純粋な心の持ち主なんでしょうね。お話を聞いて、私も久しぶりにほっこりしました。これはそのお礼です。」と、最後にチェリーを乗せて、スッとグラスを差し出した。

「これは？」受け取ったグラスを明かりに透かして見ると、キレイなピンク色が光を反射してグラス全体が輝いて見えた。

マスターは「ウォッカベースのオリジナルです。」とにこやかに答えた後「名前をつけるなら・・・」と少しばかり逡巡して

「そうですね。『デスティニー』とでもつけましょうか。きっとあなたと彼氏さんの出会いは偶然なんかじゃなく、運命でしょうから。」とほほ笑んだ。

顔が熱くなったのは一気に飲んだカクテルが思いのほか強かったせいで、マスターの言葉が嬉しかったせいじゃない。とあたしは誰に言い訳してるんだろう。

「で？」
「で？って、何。」
「聡美さんを誘うって話ですよ。」

終わってなかった。
アパートへ帰る途中、昨日と同じファミレスへと半ば強引に連れてこられた俺は、至近距離でまっすぐに見つめられている。さすがにこの距離で女の子に見られると、目のやり場に困る。と視線を宙に舞わせる。

「いや、そりゃ一緒に居たいと思うよ。」
「だったら誘えばいいじゃないですか。」
「いや、だから休みがね。取れないって言うか。」
「それは言い訳です。」と篠原さんは自分の事のように頬を膨らませる。
「別に、休みの日じゃなくてもいいんですよ。仕事の後、『少しだけお酒飲んで帰ろうか？』とか、誘えばいいんですよ。」
「いや、仕事の後は篠原さんを家まで護衛しないと。」
「あ、そっか。じゃあお昼とかは？『一緒に食べようか？』って。」
「そ、そうだね。」
俺は篠原さんの勢いに気おされて、しどろもどろだった。まるで尋問されてるような感じだ。尋問された事はないけど。
「先輩は奥手すぎます。」

注文した料理が届き、攻勢も止んだかと思いきや、篠原さんはパスタに手をつけながら、なおも続けた。
「そ、そうかな。」奥手、というか初めてで解らないんですけど。と心で呟く。さすがにそれは言えない。
「もうエッチはしました？」
篠原さんはファミレスという開けた場所であるにも関わらず、あっけらかんと訊ねる。フォークに巻いたパスタを口に運びながら、だ。
「え、え、え・・・。」さすがに言葉に詰まる。それが俺にとって最大ともいえる大きな壁だからだ。

今までに何度か聡美さんと良い雰囲気になったことはある。でも付き合って半年、キス以上に発展したことはなかった。先に進んでもいいものなのか、それ以前にどう進んだらいいのかが解らないのだ。聡美さんと交わす口づけは、それだけで幸せに満たされるほどの暖かさがあって、満足している自分もいる。その先は、まさに未知の世界だ。

「なんとなくわかってましたけど。まだなんですね？」
篠原さんは落胆気味にそう言うと「いいですか？」と語調を強めた。
「女の子にだって性欲はあるんですからね。あんまり待たせ過ぎると聡美さんにも失礼ですよ。」

いつから恋愛相談になったんだろう？と真剣な眼差しで話す篠原さんを見ながら、年下の女の子に諭されてる俺って、どうなんだ？と思った。思いながら、なるほどそういうモノなのか、と感心させられる部分もあることが、何か情けない。
「飯塚さんの仕事はゆっくりでいいんで、休み取って聡美さんを誘

うこと。いいですね？」
　最終的には今後の方針まで篠原さんに決められている。押しが強い、というか何と言うか。これは、そう。女版岩さんだ。と思った。
「仕事は早く、が鉄則だよ。」仕事に関しては強めに言ってあげないといけないと、俺も攻勢に出てみたのだが、篠原さんは臆することもなく
「いいんですよ。あんなやつの仕事なんて。」と顔をしかめた。でも、と言いかけると「いいから。」と遮られる。
「先輩の為なんです。」
「は、はい。」
　これは、かなわないなと、まっすぐ見つめる篠原さんの大きい瞳に押し負けて、俺は素直に返事をするしかなかった。
ファミレスを出た後、後で報告聞かせてくださいね。と言った篠原さんの目は好奇の輝きを浮かべていて、してやられた。と思った。

女の子は恐い。

聡美　？

頭が痛い。昨日飲みすぎたようだ。マスターの言ってくれたことが嬉しかったのと、作ってくれるお酒がおいしかったのもあって、昨日のうちは酔いは感じなかったのだけど、今日になってしっかり二日酔いだった。
仕事が手につかないほどではないけど、さすがに頭痛と吐き気が同時に襲ってくると、気が滅入る。

「ああ？飲みすぎた？バカかお前は」
拓実は下のコンビニで買ってきたとろろそばを寄こしながら、安堵と苛立ちを等しく含んだ声を荒げた。
というのも、午前中ずっと具合悪そうにしていたあたしを心配して、お昼になって拓実が声をかけてくれたので、動く気のしなかったあたしが「動けないからとろろそば買ってきて。」と言ったからだった。

「大きい声出さないでよ。頭痛いんだから」
「お前が悪いんだよ。なんだ、ただの二日酔いかよ、心配して損した」
「ただの二日酔いも久しぶりだと辛いね」
「だから昨日言っただろ。飲みすぎるなよって。お前同じカクテル何回頼んだ？」
「だって、おいしかったんだもん」

「啓輔にあんまり仕事入れんなよ」
拓実はボリューム焼き肉弁当を頬張りながら箸を向けた。あまりに突然そんなことを言うので、とろろそばを口に運ぶのを一瞬忘れてしまう。
「何？突然」と目を丸くすると
「あいつは真面目だからな。仕事は一切、手を抜かねぇし、お前の頼みはどんなに忙しくても聞いちまうんだよ」とそっけなく言う。
啓輔の真面目さはあたしもよく知っているけど、どうして急にそんなことを言い出したのかがわからない。
「あいつ、ここ最近全然休んでねぇぞ」
「それはあたしも同じだよ。啓輔が休まない分、あたしも休まないことにしてるから」
啓輔に依頼が集中して、ほとんど休みが取れていないことは知っていた。だから、せめてあたしも付き合うことで、少なくとも帳尻合わせはしてるつもりだ。
「バカ、お前ホントに解らないのか？あいつは仕事があるうちはお前を誘ったりできねぇんだよ」
「え？そうなの？」それは考えたこともなかった。
「やっぱりか、啓輔の事を考えればすぐにわかるだろ、あの不器用が二つのことを同時にできるタイプじゃねぇことくらい。あいつのことだ、『聡美さんとの時間を作るのは仕事がひと段落してから』とか考えてるに違いない」

盲点だった。最近啓輔との時間が取れないのは、実はあたしのせいって事？
いや、そうじゃない、と思うんだけど。
「そんなの啓輔が悪いんじゃん」仕事とか関係なく誘ってくれればいいのに。
「そうだよ。あいつも悪い」拓実は一旦首肯した後、すぐさま「でもお前も悪い」と付け加える。

「あいつと付き合うなら、些細なことで落ち込んでちゃダメだ。もっと大きく構えて、もっと自分から行け」

その言葉に妙に納得したのは、啓輔と長年一緒に居た拓実だからこその説得力みたいなものを感じたからで、つまりあたしは「うぅ」と唸ったきり、何も言えなくなった。

ようやく二日酔いが抜けてきたのは午後3時を過ぎた頃で、その頃になると、来週に控えた大手企業が開催するイベントの打ち合わせの準備で大忙しで二日酔いを感じている暇もなかった。

なにせ、オフィス立ち上げ以来、これほど大きな仕事は初めてだった。もともと個人向けのコーディネートを中心でやってきたのだけど、オフィスの名前が売れてくるにつれて、企業からの依頼も徐々に増え、ようやく掴んだ仕事だ。これが成功すれば他の大手へのアピールにもなる。絶対に成功させなきゃいけない仕事だった。

打ち合わせを終えて、応接室を出た頃には空はすっかり夜を迎え、窓の外を丸い月が浮かんでいた。イベント担当者を出口まで送って室内に戻ると、すでに打ち合わせをしていたあたしと拓実以外のメンバーは、自分の仕事を終え、オフィスを後にしていた。それほど広くないオフィスも二人だけになると、妙に広く感じる。

「ったく。どうして企業の連中は細かいんだろうな。俺ぁ肩凝っちまったよ」

うん、と伸びをして拓実は確かめるように腕をまわした。

「確かにね。ここまで細かく注文が入ると、正直大変だね」とイベント担当が持ってきたイメージ注文を見ながら、頭の中で構図を組み立てる。

「俺らも帰ろうぜ。後は明日だ。明日」

「そうだねぇ。あ、先帰っていいよ。あたしはもう少しやってくか

ら」
せめて今日受けた注文くらいはまとめておかないと、明日にはイメージが消えてしまう恐れがあった為、パソコンの前に座る。
「んじゃ、遠慮なく。お前もあんまり無理すんなよ。いざって時啓輔とセックスできなくなるぞ」
「うるさい、バカ」

あはは、と笑いながら拓実はドアの外へと消えて行った。どうしてあいつはそっちの方しか考えないのか、と頭を抱えるも、それを悩んだところで拓実の性格が変わるわけでもないので、すぐに思いなおす。あれが拓実の良い所でもある。と。

パソコンの電源を落としたのは結局21時を回った頃だった。二人でも広く感じるオフィスに一人だけなんだと、今さらながらに気付くと、途端に寂しさに襲われ、あたしは急いで帰る支度をした。
ドアを出る前に、戸締りを確認する。特に貴重品があるわけでもないし、ましてやパレットは3階にあるので、泥棒が入るとは思えないけど、みんなの作品のイメージなどもある為、念のため戸締り確認だけは欠かさない。

「聡美さん」と声をかけられたのは、このビル特有のレトロなエレベーターで一階ロビーに降りた時だった。いるはずのない啓輔に突然声をかけられたあたしは「へ？」と素っ頓狂な声を上げ、その場に固まってしまった。

どうして啓輔がいるの？

聡美　？（後書き）

今回から聡美と啓輔をなるべく一日置きに更新できるようにします

啓輔　？

オフィスに帰ってくると、しんと静まり返っていて、俺は一瞬入るドアを間違えたのかと思った。時計の針は１９時２０分を指している。皆もう帰ったのかな、と反射的に辺りを見渡すと、まだ残って仕事をしていた林さんが、打ち合わせ中。と小声で教えてくれた。

「今度のイベントの打ち合わせ。もう１時間以上話してるけど、まだ終わる気配ないよ」

「そうなんだ。大島さんは？」オフィス内には林さんの姿しかなく、いつも林さんの隣のデスクで仏頂面しているもう一人のメンバーの行方を訊ねる。

「もう帰ったよ。あたしもそろそろ帰るね。夕飯の支度しないと」

林さんは心が待ってるから、といつものように目を細めた。笑うと切れ長の一重まぶたが糸のように細くなる。その顔がなんとも幸せそうで、俺は林さんの笑い顔が好きだった。

「ココちゃん元気？」林さんには心ちゃんという一人娘がいる。学校が休みの日などはよくこのオフィスにも遊びに来ていて、人見知りしない性格の心ちゃんはメンバーの皆にも大人気だ。

「もう最近は生意気盛りよ」とはにかんだしかめっ面を見せて、お疲れ様、と手を振って林さんはお気に入りの柑橘の香りだけを残して帰って行った。

「わたし達も帰りましょうか」黙って会話を聞いていた篠原さんは、すでに帰り支度を整えていた。

まだ打ち合わせ中の二人を置いて帰るのも気が引けたが、あまり遅くなると篠原さんの危険が増すような気がして、心の中で聡美さ

んに謝りながら、俺も帰ることにした。

「林さんて、いつくでしたっけ？」

アパートへ続く細い道を歩きながら篠原さんが訊ねた。目線の先には暗い夜道に街路灯の明かりが、まるで順路を示すように等間隔に並んでいる。

「確か、聡美さんと一つ違いだったかな。だから三十二歳か」

「てことは、二十五歳で心ちゃんを産んだんですよね。すごいなぁ」

篠原さんは感心したように、指を折り、後二年で子供産めるかな。と独り言のように呟いた。

二十五か、と俺も同じように感心する。俺と同じ歳で結婚もせずに子供を産んだ林さんは、俺なんかよりずっと大人だったはずだ。そう考えると、未だに聡美さんをロクにデートにも誘えない俺があまりにも幼稚な気がして、途端に恥ずかしくなる。このままじゃダメだ。

突発的な焦燥感に襲われた俺は、篠原さんを無事にアパートまで送ると、自分は部屋に帰らず、歩いてきた道を戻った。今からもう一度オフィスに戻るには３０分はかかってしまう。もしかしたら着いた頃には聡美さんはいないかもしれない。そんなことも頭をよぎったが、構うものか。と足を速める。

きっと篠原さんに言われたこととか、林さんの幸せそうな顔とか、今急に感じた焦りとかが、いくじなしの俺の背中を押してるんだ。今日誘えなかったら、またずっと先になってしまう。とにかく今日は絶対に聡美さんと話をしないと。

もう一度オフィスのあるビルに戻ってきたのは２０時半を過ぎた頃だった。幸いまだオフィスの明かりは点いている。まだ帰ってい

ないようだ。
入口を開けて、ロビーに入ると、ちょうど出るところだった岩さんと出くわした。
「おお、山田。どした？忘れもんか？」
「忘れ物。うん、そうだね」今日は聡美さんと話をするのを忘れてた。
俺の顔を見るなり、岩さんはハッとした顔を見せ、ああ、そう言うことか。と零した。
「山田、」と意地の悪い笑みを浮かべると「頑張れよ」と意味深な言葉を残して、帰って行く。
「何を？」と口を開いた時にはすでに岩さんの姿はなかった。

ロビーに置かれたベンチに座り、入口のガラス越しに外を見ると、公園に並ぶ明かりが目に入った。すっかり肌寒くなった１０月の空に、オレンジの明かりが温かみを添えている。
あの公園を一緒に歩きたいって言ったら聡美さん笑うかな。

しばらくするとエレベーターの到着音がして、聡美さんが降りてくる。俺がいるベンチは軽い死角になっている為、聡美さんは気付かない。
いつになく心臓が高鳴った。突発的な焦りは聡美さんの姿を見た途端に消え去り、２カ月ぶりにデートに誘うからなのか、なかなか声が出ない。急がなくちゃ、と追いかける。聡美さんの手が出口にかかったところでようやく声が出た。けど少し震えていた。
「聡美さん」
後ろから突然呼ばれた聡美さんは、ビクンと体を震わせて、ゆっくり後ろを振り返ると不思議なものでも見るように呆けた顔で「啓輔？」とほとんど口だけで答えた。

「どうしたの？帰ったんじゃなかったの？」
ビルを出てどちらともなく公園に入り、ベンチに腰掛けると聡美さんが口を開く。オレンジの明かりに照らされた顔がとてもキレイだった。
「うん。一回帰ったんだけど、今日はどうしても聡美さんと話をしたくて」
「なに？電話じゃダメなの？」
「うん。ちゃんと言わないと、と思って」
そう言って、聡美さんの目をじっと見る。少しの恥ずかしさを滲ませながら、聡美さんも見つめ返してくれた。
急に誘ったら怒るかな。
仕事が終わらないうちに誘ってもいいのかな。
聡美さんの方が忙しいのに誘ってもいいのかな。
色々なことが瞬時に頭をめぐり、そして消えて行く。聡美さんの瞳の前では、俺の小さな考えなんてすぐに吹き飛ばされて、何もひねることもできずに伝えたい言葉はするりと口から出てしまう。
「今度休みとってどこか行こうよ」
「・・・へ？」
聡美さんは一瞬ポカンと口を開けると、噴き出した。何が可笑しかったのか解らないが、とにかく腹を抱えて笑いだした。
「あれ？何か変なこと言った？」
「違う、違う」と聡美さんは手を振ると「なんでもないよ」と笑いすぎた為か、目の端を拭った。
「どうしても話したかった事って、それだけ？」
「そうだよ」
「そう、ホント・・・」聡美さんは思いだし笑いを堪えながら、俺

の方に向き直ると、啓輔らしいね。と言った。
「なんか、ゴメン」
「なんで謝るの？」
「いや、なんとなく」
突然爆笑した聡美さんの行動と言うか、心境が理解できなくて、なんとはなしに謝っていた。
そんな俺の顔に気付いてか、聡美さんはじっと目を見ながら、優しい笑みを浮かべて、手を広げた。
何の意味か解らずに、キョトンとしていると、「コラ」と睨む。
「デートの誘いだけじゃダメ」と首に手を回す。
息がかかるほどの距離に聡美さんの顔が近づき、鼓動が一気にレッドゾーンに入った。
「あ、あの」と口を開きかけると、指でふさがれる。そして聡美さんは目を閉じて「早く」と一言だけ呟いた。
さすがにこれ以上訊くのも野暮ってものかも、と思う。なぜこうなったのかは解らなかったが、唇をそっと重ねた。
2カ月ぶりのキスは優しく幸せに満ちていた。

聡美　？

いつにもまして真剣な顔で啓輔はあたしを見つめる、夜の公園は人の影もなく、この瞬間あたしの為だけにこの公園は存在していた。オレンジの明かりに照らされたベンチは見つめあうあたし達をこの暗い公園にぼんやりと映していることだろう。それはさながら舞台のように、見る者がいたなら固唾をのんで役者の動きを見守る。そんなシーンだ。

「ちゃんと言わないと、と思って」

啓輔はそう言ったきりあたしをじっと見つめたまま動かない。心臓がドキリと鳴った。痛いくらいに鼓動を強くして容赦なく焦りを掻きたてる。

何を伝えようとしてるの？

電話では言えない事って何？

期待と不安が交互に押し寄せる。

「ゴメン、もう・・・」と言って啓輔は目を伏せる。

もう、の先は聞かなくても解る。ああ、これで終わりなんだ。そう思うと目の前が暗くなっていくような感覚に襲われる。

想像しただけで少し泣きそうになった。昔は恋人に別れ話をされても泣くことなんてなかったのに、いつからかゆるくなった涙腺が

自分の意志とは関係なく涙をにじませる。
啓輔に出会って、彼の純粋さにあたしの心も昔に戻ったみたいだ。
初恋に胸をときめかせていた頃に。
今啓輔の言葉を待っているあたしは、まさしくあの頃の子供っぽいドキドキに似ている。勇気をだして呼びだした大好きな人を前に返事を待っているような感覚。
啓輔はじっと見つめたまま、まだ動かない。

「エッチしよう」と啓輔は火が出るんじゃないかと思うほど顔を赤らめながら、でもしっかりと言う。
ようやくその言葉が聞けた、とあたしは安心と嬉しさで胸がいっぱいになる。きっとあたしも赤くなっているだろう。恥ずかしいほどに。

こんな妄想をしてしまうのは、さっき拓実に言われたことが関係してるんだろう。
拓実が帰り際に発した「セックス」の言葉にあたしの体は間違いなく大人の反応をした。それが昔とは違う所なんだと思う。
それは、あたしが知ってるから。好きな人と初めて結ばれる時の幸せや、気持ちよさを。
きっと啓輔と結ばれたらあたしは泣いてしまう。啓輔の優しさに包まれて幸福のまま、すぐに絶頂を迎えてしまうかもしれない。

「ゴメン。初めてだからうまくできないと思うけど」そう言って啓輔はぎこちなくあたしを抱きしめる。服を通さない素肌の感触は啓輔の想いを直接届けてくれる。
うまくなんかなくたっていい。すぐに終わってしまってもいい。
だって、この瞬間がなにより幸せだから。
「啓輔――」

「今度休み取ってどこか行こうよ」
妄想を遮るようにあたしの耳は啓輔の言葉を捉えた。それはまるで風が流れるようにあまりにも自然に耳の脇を通り過ぎてしまうものだから、あたしは「へ？」と変な声を出していた。

神妙な顔して何を言うのかと思えば、たったそれだけ？
啓輔は言った後も真面目な顔で見つめている。その顔が冗談や嘘ではないことを教えてくれた。
その瞬間、あたしは思わず噴き出していた。
この短い時間で想像したいくつもの事があたしのただの妄想でしかなかった。そのことが可笑しくて笑いが止まらなかった。

「あれ？何か変なこと言った？」不安な顔をして啓輔が訊ねる。
「違う、違う」
あたしが悪いの。啓輔を一瞬でも疑ってしまったこと。妄想が暴走して一人で舞い上がったこと。啓輔は啓輔のペースで進もうとしてるのに、あたしだけ急いで先に進もうとしていた。
「何でもない」さっきまでしていた妄想は、啓輔には言えない。

大事な話ってそれだけ？と訊ねると、啓輔は申し訳なさそうにゴメン、と謝った。
ううん。謝るのはあたしの方。啓輔に想いを伝えた日から、啓輔のペースに合わせるって誓ったのに、一人で先に進もうとしてゴメンね。と心で謝る。
『いつまでも待っていられる歳じゃねぇだろ』
拓実に言われた言葉が頭によぎる。

だからなんだ。啓輔はゆっくりだもん。だから待つって決めたんだもん。
きっと啓輔は歳なんて気にしない。啓輔のペースがあたし達のペースだ。

でもやっぱりそれだけじゃ満足できないのはしょうがない。せめて今、この時に少しでも幸せを感じたくて、あたしは手を広げた。抱きしめて、と。

啓輔はキョトンとしていた。
『啓輔も悪い』拓実の言った通り。お前も悪いんだよ、そろそろあたしの気持ちも解るようになれよ。

仕方なく自分から腕を回す。今日は絶対キスするんだ。
急に抱きつかれて啓輔は一瞬固まってしまったけど、目を閉じると、ようやくあたしの唇に優しさをくれた。子供っぽい重ねるだけのキス。ダメ、それじゃ満足できないと、あたしから舌をからませる。あたしが欲しいのはこんなもんじゃないんだぞ、とせめて少しでも伝わるように長く、じっくりと。

啓輔　？

今日は朝から聡美さんの姿はオフィスにはなかった。
大手企業のイベントで今日から一週間は現場だ。それが終わったら、ようやく休みが取れる。

一週間なんてあっという間だ。聡美さんの顔が見られない寂しさも、こないだのキスの余韻が軽くしてくれる。あれから3日が経っているが、目を閉じればまだ思いだすことができた。

「先輩。なにニヤついてるんですか」
目を開けると篠原さんがあきれ顔で見下ろしていた。顔に出ていたらしい。
「あ、いや別に何も」と口ごもりながら急激に顔が熱くなるのを感じる。
「何かいいことあったんでしょ？」
篠原さんが好奇の眼差しを向けると、それに気付いた林さんが、何？と興味を示す。
「そう言えば聡美もこの2日くらい機嫌良かったよね。山田くん何かしたの？」
「何でもないって」と手を振る。
「何かあったことは、明白ですよね」
「こんなにわかりやすい二人は珍しいよ」
俺の否定もそっちのけで篠原さんと林さんは独自な盛り上がりを見せ始める。

「もしかして、とうとう？」と篠原さんが言えば
「いや、山田くんのことだからまだそこまでは行ってないと思う」と林さんが思案する。
「わかんないですよ、もしかしたら聡美さんの方からってことも」
「あり得なくはないわね。岩崎くん辺りに吹き込まれて、焦りを感じてってところかしら」
「そう言えば、今聡美さんのパートナー岩崎さんですもんね」
「聡美ももう三十三だからね。焦る気持ちはよくわかる」
「じゃあ、やっぱり・・・？」

二人の妄想は止まることなく勝手に膨らんで、今や俺の及ばないところまで成長しつつある。

「山田くんまだ若いから・・・」
「えぇ～じゃあ何回も？」
「それで聡美も満足して・・・」
「いいなぁ・・・」

もはや口を挟む余地もなく、おろおろと二人の妄想の行方を追っていると、林さんの隣でいつものように仏頂面をしていた大島さんが大げさにため息をついた。
「山田にそこまでできるわけないでしょ。おおかた『気持ちが通じ合って嬉しい』とか『手を繋げて嬉しい』とか、そのくらいのレベルですよ」

彼のその言葉には俺も納得してしまうほどの説得力があり、二人は「そうだよね」と安易に納得した。でもなんだかバカにされた気がするのはなぜだろう。

「わたしもいいことあったんですよ」
いつものようにアパートへの帰り道を一緒に歩いていると、篠原さんは報告するでもなく呟くように言った。
「三浦くんにデートに誘われたんです」
「へぇ・・・」意外だった。
「ようやくって感じですかね。三浦くんと出会って４年目でようやく」
「篠原さんは三浦さんのことが好きなの？」
そう訊くと、篠原さんは前を向いたまま頷いた。「もうずっと前から。まだ三浦くんのこと三浦先輩って呼んでた頃から好きでした」
不思議だと思った。篠原さんは一年付き合った元彼からストーカー被害を受けている。元彼ってことは付き合っていたんだろうし、付き合っていたって事は好きだったんだろう。それなのに三浦さんのことはずっと前から好きだったと言う。

「今、先輩が何考えてるか解りますよ」
長い沈黙の後、必死に考えていた俺の顔を読み取ったのか、篠原さんは弱弱しい笑顔を浮かべた。
「ごめん」
「いえ、先輩は一途だから。きっとわかんなくていいんだと思います。あたしは三浦くんが好きなくせに、他の男と付き合っちゃうような女ですから」と篠原さんは自嘲気味に笑う。
「こんなだから恨まれちゃうんでしょうね」
「三浦さんに想いを伝えようとは思わなかったの？」
「思いましたよ、真っ先に。でもその頃三浦くんには彼女がいたから。諦めるしかなくて、そのうちにわたしの事好きだって言ってくれる人と」
遠いものでも見るように、篠原さんの視線はぼんやりと道の先に投げられている。無表情に近い顔をしていたが、俺にはそれが強い

後悔の顔のように見えた。
「もしかして、三浦さんの事が忘れられなくて？」
その質問には答えが返ってこなかった。答えたくないのか、とも思ったがたぶん無言が答えなのだろう。
「バカなんです、わたし」
「なんで？それって、結局篠原さんも一途に三浦さんの事思ってただけでしょ？」
そう言うと篠原さんは一瞬驚きの表情を浮かべ、そしてすぐに笑いだした。
「なんか先輩に言われると恥ずかしいです」
「なにそれ」
「別に」と言って白い歯を見せる篠原さんは、俺から見てもすごく可愛かった。

「良かったね、篠原さん」
「はい」

聡美　？

週末から始まるイベント会場の設営も終盤を迎え、それに伴いあたし達の仕事も終わろうとしていた。この仕事が終わればようやく休みが取れる。まだ知美と一緒にいる啓輔が心配だし、ほんのすこし疑惑は残っている。でもあの時久しぶりにしたキスからはやっぱり強い愛情を感じたし、啓輔とゆっくり過ごせばこの疑惑も杞憂に終わる。あたしはそう確信していた。

「ようやく終わったな。俺はもう企業の仕事は勘弁だからな」
イメージボードをレイアウトの照らし合わせをしていると、拓実が缶コーヒーを差し出しながら話しかけてくる。
「バカなこと言わないでよ。この仕事が成功したらもっと増えるかもしれないんだよ」
拓実の性格上、細かい注文をしてくる企業の仕事に向かないことは解っていた。あたしは缶コーヒーを受け取りながら、拓実が文句を言うのも仕方がないと思った。
「もし仕事が増えるんならこっちを中心でやるチームを作れよ。こういう仕事は俺よりも、林とか大島の方が向いてるよ。あいつら真面目だからな」
「あら、真面目さで言えば啓輔でしょ」
「あいつをこっちに回すのか？あいつがどんだけ人気か知ってんだろ。もったいねぇよ」

確かに、口コミで広がった啓輔の人気は今やオフィスのトップだった。彼の仕事の丁寧さに加えてあの人柄だ、人気が出るのも当然

だろうと思う。なぜか依頼人の多くが３０代女性に偏っているのがあたしとしては少々腑に落ちないけど。

拓実は缶コーヒーを一口飲むと「ところで」と唐突に話題を変えた。
「この仕事終わったらお前らなんか約束してんだろ？」
どうしてそれを？と思わず口から零れた。
「啓輔が話したの？」
「バーカ、お前の顔見りゃわかんだろ。毎日ニヤけた顔さらしやがって」
「ニヤけてないよ」と顔に手を当てる。そんなに出てた？
「いいから、啓輔のことだから『デートできればいい』くらいにしか思ってねぇだろ。お前はそれでいいのか？」
「どういう意味よ」
「我慢できんのかってことだよ」
「あたしは、あんたみたいに性欲で生きてないから大丈夫です」と嫌味交じりに言うが、拓実は嫌味など全く意に介さず、平然と話を続ける。
「久しぶりに二人きりになってみろ、絶対我慢できなくなるぞ」
「飢えてるみたいに言わないでよ」と言葉を返すが、飢えてねぇのかよ。と言われるとすぐに言い返せない自分もいた。

確かに、最近拓実といることが多いせいだろうか、あたし自身啓輔の体を求めている部分も否めない。こないだだってあたしからキスを迫ったし。拓実の言うことを真に受けるのもしゃくだけど、二人きりになったら我慢できなくなる、かも。

「前にも言ったけど、もし本当にやりたいんだったら、自分から行けよ。啓輔は経験がないから誘惑すれば一発だ」
拓実は茶化すわけでもなく、いたって真面目だ。拓実なりにあた

し達の事を考えて言ってくれているのは解る。それは解るんだけど露骨なんだよなぁ。

「もしかしたら啓輔も待ってるかもしれねぇぞ」

「何を？」

「お前の許しを、だよ。お前に許してもらわないと先に進めないのかもしれない。もしそうだとしたら、いくら待ってても先に進待ねぇぞ」

それは衝撃だった。まさに雷に打たれたような、という表現がぴたりと当てはまるほどの強い衝撃だ。

啓輔も待っている、とは考えたことがなかった。あたしが待っているように、啓輔も待っていても確かにおかしくはない。そうなんだ、待ってるんだ。

得意げな顔で腕を組む拓実を横目で見ながら、もしも本当にそういう雰囲気になったら

・・・誘惑してみようかな、とほんの少しだけ、思った。

啓輔　？

電話がかかってきた。濡れた頭をタオルで拭いていると、ガラステーブルの上で携帯が音を響かせながら震えだした。デジタルの置時計は携帯の横で２１：４０と表示している。この時間は、聡美さんからじゃないなと、風呂から上がったばかりで服も着ていない状態だったので、どうしようかと悩んだが、とりあえず携帯を開いてみると、着信画面には三浦さんの名前が点滅していた。

気がついた以上でないのも失礼だと思い、受話ボタンを押して携帯を耳に当てる。

「もしもし」日本人の電話における第一声を発しながら、急いでパンツだけは履いた。

「ああ、山田さん。お久しぶりです」

久しぶりの三浦さんの声は明るかった。元々人当たりの良い人だが、それとは別に何かが彼の声を明るくしている。といった感じだ。

「どうかしました？三浦さんから連絡なんて珍しいですね」

「ええ、実は山田さんに折り入ってお願いしたいことがありまして」

そう言うと、三浦さんはさっきの明るい声から一転、ほんの少し声のトーンを落として、誰に聞かれるわけでもないのに、秘密を話すときのようにひっそりときりだした。

「実は今度篠原と出かけることになったんですけど」

「ああ、聞きましたよ。篠原さん喜んでましたね」

「そうですか・・・」

三浦さんはなぜか寂しげだった。

「僕が篠原を誘ったのは、ただ遊ぶ為だけじゃないんです」

三浦さんが篠原さんを誘ったもう一つの理由は、篠原さんから相談を受けてから2週間以上姿すら現さない元彼をおびき出す為だった。ドアの一件以降、危機感を強くした三浦さんはこの事態をなるべく早く解決したいのだそうだ。

そこで、待っているだけじゃなく、こっちから動くことにした。篠原さんが動けば、元彼は後をつけてくるのではないかと考えたらしい。

俺は三浦さんの話をただ黙って聞いていた。肌寒さを覚え体が震える。10月の秋口に風呂上がりで服も着ないでいた為、湯冷めしたのかもしれないと思った。それとも三浦さんの決意が伝わっての武者震いだろうか。

三浦さんは最後に、このことは篠原には言ってないんです。結果的に篠原を騙しているような気がして気が引けるんですけど。と罪悪感を滲ませた。

「篠原さん、楽しみにしてます。三浦さんも楽しんでくればいいじゃないですか。それなら騙したことにはならないでしょ」

「そうですね。そう言ってもらえると少し楽になります」

「それで、頼みたいことってなんですか？」と訊ねると、三浦さんはそれが本題であるにも関わらず忘れていたようで、あ、そうそう。と声を高くした。

「たぶん元彼は僕達を追ってくるとは思うんですけど、もう一つの可能性として、篠原がいない間に部屋に侵入することも考えられるんです。それで申し訳ないんですけどその日、篠原の部屋を山田さんに見張っていていただけないかな、と」

無茶なお願いなのは解ってるんですが、と三浦さんは申し訳なさ

そうに言葉をつないだ。確かに、三浦さんの言いたいことは俺にも解る。部屋に誰もいなくなればストーカーにとっては好都合だろうし。それを見張る人物がいないと何をされるか気が気ではないだろう。

「ええ、それは構いませんが―」
この頼みは聞いてあげるべきだ。ただ気がかりなことが一つだけあった。
「それは、いつですか？」うちのオフィスの基本的な休みは土日だ。そして久しぶりに約束した聡美さんとのデートは土曜日。その日じゃなければいいのだが。

「土曜日なんです。もちろん山田さんの都合がよければでいいんですが」

嫌な予感は当たるものだ。

「もし、もしですよ、俺がその日都合が悪かったらどうします？」
「その時はしょうがないですね。僕のせいで篠原の部屋に何かされる訳にいかないので、キャンセルします」

『ようやくって感じでかね。三浦くんと出会って４年目でようやく』

篠原さんの嬉しそうな顔が浮かぶ。４年も想い続けて、自分の想いを貫く為に彼氏と別れて、そのせいでストーカー行為まで受けている彼女が、ようやく掴んだチャンスだ。出来れば叶えさせてあげたい。
この頼みは聞いてあげるべきだ。

電話がかかってきた。ガラステーブルの上で携帯が音を響かせながら震えだした。デジタルの置時計は携帯の横で２２：２１と表示している。
すっかり湯冷めした体は服を着た後も肌寒さが消えず、手足の先が冷たくなっていた。携帯を掴む手に力が入らなくて、掴み損ねた携帯が絨毯の上で跳ねた。

「もしもし」
「もう、かかってこないからこっちからかけちゃったよ」
携帯の向こうの聡美さんの声は弾んでいた。
「ああ、ごめんね。友達からかかってきちゃってさ」
「そう？ねぇ今度の土曜日どこ行く？」
その言葉に心臓がズキンと痛んだ。聡美さんも楽しみにしてくれていたんだ。もちろん俺だって楽しみだった。なにせ2カ月ぶりの二人の時間なのだから。

口を開くのが重い。なるべく明るい声を出さなくちゃ。
「聡美さん、その日なんだけどさ―」

拓実と真理（前書き）

ほんの少し拓実と真理のお話にお付き合いください

拓実と真理

「珍しいなお前が飲みについてくるなんて。ココちゃんはどうしたんだよ」
「心はお母さんに預けてきた。あたしだってたまには息抜きしたいじゃん」

林真理は初めてくる岩崎拓実の行きつけのバーの雰囲気の良さにすっかり魅了されていた。マスターの人柄といい、店内をゆったりと流れるジャズの響きといい、店の狭さといい、文句なしだ。カウンターの棚は青いライトに並べられたグラスが照らされていて、彼女の美的感覚を大いにくすぐる。

「こんな良い店知ってたんだね。気に入っちゃった」
マスターに作ってもらったカクテルの味にほんのり酔い、真理は顔を少し赤くした。
「最近は色々な女の子を連れてくるね、岩崎くん」マスターはカウンターの奥でゆったりと笑う。それを見た真理が即座に好奇の目を向けるのを見て、岩崎は煩わしいと目をそらした。
「相変わらずモテるんだ？岩崎くん」
「そんなんじゃねぇよ。マスターも人聞きの悪いこと言わないでくれよな。俺が連れてきたのは聡美だけだよ」
岩崎が迷惑そうに睨むと、マスターは肩をすくめる。そのやり取りがまるで仲の良い友達のようで、真理は少し可笑しかった。なにせマスターと岩崎は十以上も歳が離れているのだ。
「マスター、岩崎くんはよく来るの？」

「ええ、ほぼ毎週のように来てくれてますよ」
「へぇ、ここが好きなんだね」
「ああ、俺じゃなくて誰かが好きなんだろ。来たくて来てるわけじゃねぇよ」
岩崎はそう言ってまるで何かに訴えかけるようにじっと天井を睨むと
「俺だってたまには違う店に行きたいよ」と嘆いた。
岩崎が何を言っているのか解らず、真理はマスターに伺ったが、マスターも肩をすくめて首をひねっていた。

「岩崎くんは誰かと付き合ったりとかしないの？」真理は宙を漂うような気分の良い酔いに任せて、今まで疑問に思っていたことを訊ねてみることにした。
「面倒くせぇな。わざわざ付き合うのなんて」
岩崎はグラスの中のウイスキーを一息に煽ると、苦々しい顔を浮かべた。それが強いアルコールのためなのか、それとも何か嫌な事を思い出しての事なのか、真理には解らなかった。
「でも山田くんと聡美のことに関してはずいぶんと首を突っ込むじゃない」
「あいつらは別だよ。俺は恋人を否定するわけじゃないんだ。人には愛する人が必要だと思うし、互いに惹かれあってるなら幸せになって欲しいと思う。あいつら、もどかしいんだよ」
そう言って岩崎はタバコに火をつけ、ゆっくりと煙をくゆらせた。
「そうだねぇ。聡美も久しぶりの恋愛だから、ずいぶん臆病になってるみたいだし」
「林からも言ってやれよ。山田は聡美一筋なんだから、後は聡美次第だってな」
「聡美も葛藤してるんだよ、きっと。温かい目で見守ってやろうよ。何かあったらあたし達で手助けしてあげればいいし」

「それより、岩崎くんの方が深刻じゃない？」
「何が」
岩崎は唐突に向けられた話の指針を探れずに怪訝そうに真理を見つめた。
「君にも本当の恋愛ってやつが必要だと思うんだけど」
「はっ。俺なんかよりもお前はどうなんだよ。そろそろココちゃんにお父さんを作ってやれよ」
「あら、心はあれでなかなか強い子よ。お父さんなんて必要ないわ」
真理はカクテルに手を伸ばし、それに、と付け加えて「キミに心配されなくてもあたしにも良い人いるんだから」とグラスを開けて少女のような笑みを浮かべた。

「なんか気になるんだよなぁ・・・」
岩崎は程よくまわった酔いに思考を鈍くしながら、呟いた。
「何が」
「山田は何があっても聡美一筋だ。一途っていう言葉を通り越してバカの域に達するほどのな。だけど聡美はどうなんだ？」
「聡美だって山田くんのこと好きでしょ？何言ってんの」
「確かにそれはそうなんだろうけど、最近のあいつの態度が気になるんだよなぁ、あいつ何かひっかってんじゃねぇか？」
「そう？機嫌よかったじゃん」
「なんか、嫌な予感がするんだよ」
そう言ったきり岩崎は黙り込んだ。新しくウイスキーが注がれたグラスに水滴が付き、テーブルに丸い溜まりを作る。グラスの中で溶けた氷がカランと音を立てた。
真理は岩崎が何を言いたいのか解らなかったが、嫌な予感がする、という言葉がやけに耳に残った。

拓実と真理（後書き）

次からまた聡美と啓輔の話に戻ります

聡美　？

「聡美さんの口に合うか解らないけど」
そう言って啓輔はキッチンからコーヒーを注いだカップを二つ持ってくる。一つを小さめのガラステーブルに置き、もう一つを差し出した。
「聡美さんに教えてもらった通りに淹れてみたんだ」

久しぶりに啓輔と取れた時間。あたしは啓輔の部屋に来ていた。ホントはどこかに出かける予定だったんだけど、こないだ突然啓輔が「家に来ない？」と言いだした。
正直心臓が跳ね上がる思いだった。久しぶりのデートが家でまったりするだなんて、あたしのこと誘ってるの？と啓輔の顔を伺うが、今のところそんなそぶりは見せる気配がない。
テーブルの上に置かれたデジタルの置時計は嫌にゆっくりとその表示を変えている。ここに来てずいぶん時間が経つように思うんだけど、まだ午前中だ。あたしは啓輔にバレないように小さく深呼吸して、いつ啓輔が来てもいいように心を決めた。

「うん、おいしいよ」コーヒーを一口飲んであたしは笑顔を作った、けどうまく笑えているのかすら自信がない。おいしいとは言ったものの、味なんかよくわからなかった。落ち着けあたし。
「ホント？良かった」
啓輔は屈託のない笑顔を見せる。どういうつもりなの？

あたしの覚悟なんかお構いなしに時間は過ぎて、窓から差し込む太陽の光は徐々にその位置を変えてあたしの影を柔らかい絨毯の上に気がつかないスピードで伸ばしていく。啓輔は楽しそうに話すし、あたしもこうしてゆっくりするのは嫌いじゃないけど、物足りない。拓実の言った通りかも。我慢できないかも。

さっきから啓輔が腰かけているベッドが気になって仕方がない。キレイにセットされたベッドは啓輔が座っている所からシーツが皺を作ってまっすぐに伸びている。まっすぐに伸びた皺はベッドの端まで届くことはなく溶けるように消えていく。

毎日啓輔が使っているベッド。このベッドで抱かれたら、あたしの体もあの皺のように溶けるように消えてしまうんじゃないだろうか。

どうして部屋に招いたのに何もしないの？
拓実の言うとおり待ってるの？
あたしも待ってるんだよ。
どうして気付かないんだよ。バカ啓輔。

「聡美さん、どうかしたの？具合悪い？」
啓輔の心配そうな顔で我に帰る。
「ううん、何でもない。大丈夫だよ」大丈夫じゃないよ。もう限界だよ。
「横になる？ベッド使っていいから」
これは天然？それとも誘ってる？もう解らないよ。
やっぱりあたしから行くしかないのかと覚悟を決める。

拓実にそそのかされてっていうのが気に入らないけど。と自分に言い訳をしながらあたしはおもむろに啓輔の横に座った。
あたしの動作を黙って見ていた啓輔は無邪気な顔でベッドを開ける。無邪気って言うのは時に残酷だな、と思う。啓輔に少しでもあたしの気持ちが伝われば今のあたしを見てこんな顔はできないはずなのに。

「何か作ろうか？お粥とかのほうが良いかな？」とキッチンへ向かおうとする啓輔の手を取り、もう一度横に座らせる。啓輔はなぜ止められたのか解らないといった表情を浮かべているけど、こうすれば解るだろうと、啓輔の胸に顔をうずめてやった。

「さ、聡美、さん？」
啓輔の早くなった鼓動を直に感じて、少し嬉しくなる。
「啓輔、ドキドキしてるよ」
「ど、どうしたの？」
「啓輔が悪いんだよ」そう言って顔を上げると、真っ赤になった啓輔の顔がそこにあった。

ホラ、やっぱり啓輔も意識してたんだ。ホントはちょっと期待してたんでしょ。
立場が逆だけど、ま、いっか。

あたしはゆっくり啓輔の首に手を回す。顔を近づけると啓輔もぎこちなくあたしの背中に手をまわした。ようやくその気になってくれたかな。目を閉じる。もう唇はすぐそこだ。

「コーヒーで良いかな？」
「あ、うん。ありがと」
聡美さんは窓際に腰かけて、初めてくる俺の部屋を物珍しそうに眺めていた。聡美さんの家に比べたら、ここなんてウサギ小屋だよ。と心で呟く。

「今度の土曜日どこに行く？」
「聡美さん、その日なんだけどさ、家来ない？」
三浦さんの頼みを断れなかった俺は、デートの予定を変更して、聡美さんを家に招いた。篠原さんと三浦さんのデートをキャンセルさせたくない。けど自分の方もキャンセルしたくない。葛藤の末、俺が出した結論は、家でまったりする。だった。
というのも家のアパートは壁が薄く、隣の音が丸聞こえなのだ。だからもし今日篠原さんが出かけている間にストーカーが忍び込んだとしても、家に居れば音で解る。聡美さんには申し訳ないけど、俺にはこれしか浮かばなかった。

「うん、おいしいよ」
聡美さんはコーヒーを一口飲んで笑顔を見せた。その笑顔がかわいくて思わずハッとする。自分の家に聡美さんがいるっていうだけでどうしてこんなに意識してしまうんだろう。
「ホント？良かった。前に聡美さんの家で飲んだコーヒーに少しで

も近づきたくて、最近毎日淹れてるんだ」

俺はとにかく喋り続けた。少しでも黙ってしまうと理性が飛んでしまうような気がして恐かった。久しぶりのデートを楽しみにしてくれていた聡美さんを裏切りたくはない。

聡美さんは相槌を打つばかりでほとんど喋らなかった。時折遠くを見るような目をしてどこかを見ていたり、ボーっとしてるのかと思えば急にそわそわしたりと、少し様子がおかしい。

もしかしたら具合が悪いのかと思った。思えば聡美さんもしばらく休んでいないわけだし、疲れが溜まっているのかもしれない。心配になった俺は、聡美さんに横になるように勧めた。もし具合が悪いのなら、看病をして一日を終えてもいい。

聡美さんは「ああ」だか「うん」だか、あいまいな返事をして、ふらふらと立ち上がると、俺の隣にストンと腰をおろした。目が虚ろで顔も少し紅潮している。熱があるのかもしれない。

「何か作ろうか？お粥とかのほうが良いかな？」

今朝炊いたご飯がまだ残っているからそれでお粥を作ろうと立ち上がると、思いがけず腕を引っ張られた。よろけ気味に無理やり座らされると、急に聡美さんが体を寄せてくるものだから、心臓が跳ね上がる。

「さ、聡美さん？」そんなにくっつかれると、俺我慢できなくなっちゃうよ。

「啓輔、ドキドキしてるよ」

「ど、どうしたの？」

もしかして聡美さんも意識してたのかな？様子がおかしかったの

もそのせいなのかな。

「啓輔が悪いんだよ」そう言って上目づかいに見つめる聡美さんがあまりにもかわいくて、その瞬間理性で抑えつけていた感情があふれてしまった。

そっと首に腕がからみつく。俺の目はもう聡美さんの唇に釘付けだ。背中に手を回して、ゆっくり引き寄せる。

鼻と鼻が触れる、キスまであとほんの数ミリのところで携帯が鳴った。思わず顔を上げると聡美さんの残念そうな顔の先で、ガラステーブルの上で俺の携帯が震えていた。

「・・・電話だ」

「・・・出なくてもいいじゃん」

聡美さんは首に回した腕を離そうとしない。俺も背中にまわした腕を離したくなかった。きっとこれを離したら先に進むタイミングを失ってしまう。でも―

「大事な電話かもしれないよ」

「今あたしとこうする以上に大事なことってあるの？」

腕にぐっと力を込めるのが解る。続きをしたい。聡美さんとキスがしたい。キスだけじゃなくその先も―

「・・・ダメだよ。やっぱり出ないと」

背中にまわした手を離す。それだけで全てを手放したような寂しさに襲われた。ガラスに振動を伝えて嫌な音を立てる携帯を恨めし

く手に取る。電話の相手は三浦さんだった。

もうそろそろ帰る、という報告と、篠原さんの部屋に異常がなかったかどうかの確認。

「無茶なお願いを聞いてくれてありがとうございました」と三浦さんは明るい声を出した。

「いえ、いいんですよ。それより楽しかったですか？」

「え？・・・ええ。楽しかったです」

「そう、それなら引き受けた甲斐がある」

携帯を置いて振り返ると、ベッドに座ったまま聡美さんは黙って見つめていた。もうその眼にさっきまでの雰囲気は滲んでいない。いっそ冷ややかな視線と言った方がいいほどだ。当然だな、と思った。

「誰からだったの？」そう訊ねる聡美さんの声は限りなく小さく、限りなく冷たい。

「・・・知り合いからだった」

でなければよかったのかもしれない。そうすれば聡美さんを怒らせることもなかったし、こんなに罪悪感を抱くこともなかったのに。

聡美さんの視線が、痛い。たった一本の電話で全てが変わってしまった。

聡美　？

玄関を開けて、明かりをつけるなりあたしは「はぁ」と大きなため息をついた。無意識なんかじゃなく意図的に吐いた。

今日もできなかった。

どうしてもしたかったわけじゃないけど、して欲しかった。

倒れ込むようにソファに体を沈める。妙に頭が重かった。怒りやら悲しさやらで頭の中がぐちゃぐちゃだ。

雰囲気は間違いなく良かった。啓輔もその気になっていたと思う。

あの電話さえかかってこなければ。

どうしてあの状況で啓輔は電話に出たんだろう。そんなに気になることでもあったんだろうか。啓輔は知り合いからだと言っていたけど、目を合わせようとはしなかった。あの態度があたしの疑惑を強くする。

ホントにただの知り合いなの？

やっぱり何か隠してるんじゃないの？

だってあたしと続きをするよりも電話に出ることを選んだし。よほど大事な相手がいない限りそんなことしないはずだもん。

やっぱりあたしに魅力がないのかな？

やっぱり八歳も年上だからなのかな？

「はぁ・・・」またため息が出た。今度は無意識だった。
今日会えば疑惑がなくなると思っていたのに、なくなるどころか深くなってしまった。それだけがショックだった。
もう今日はお風呂に入るのも面倒くさいな。

体がソファに沈んだまま動くことを拒否する。『気が沈む』と言うけど、気が沈むと体も沈んでしまう。まるで体に重い鎖が巻きついているかのようだ。
このまま寝ちゃおうかな。
ああ、でも化粧だけは落とさないと。

体をソファに押し付ける重い鎖を振り払って、なんとか起き上がる。ぼんやりする頭を振って、重い体を引きずりながら洗面所に向かう。

化粧を落とすと、洗面台の前に情けない顔をした女が立っていた。大きい鏡に映る自分の顔。これ自分の顔？
二十三の頃から仕事に生き、自分の仕事に絶対の自信を持って、周りの声を力でねじ伏せてきた、あの初芝聡美さんがそこに映っているはずなのに、現実は今にも泣きそうな弱弱しい女の顔をまざまざと映している。

リビングで携帯が鳴る音が聞こえた。メールの着信音だ。
じっと鏡を睨みつけると、一瞬鏡の中の自分が笑ったような気がしてハッとする。
まるで鏡の中のあたしが現実のあたしを見て嘲笑っているような気

がして無性に腹が立った。

リビングに戻ると、携帯が緑色の着信ランプを点滅させていた。あたしのイライラを助長するかのように定期的に明滅する携帯を無造作に取り上げる。今は何もかもが敵に見えた。

携帯を開く。メール一件。啓輔からだ。

「聡美さん、今日はごめんね。せっかく来てもらったのに怒らせちゃって・・・ホントにゴメン」

メールを見た瞬間に全身の血が全部頭に上って急速に沸騰する。怒りが頂点を超え、体中のうぶ毛が逆立つような感覚を覚えた。

こいつ謝りやがった！

苛立ち任せに携帯をソファに叩きつける。

啓輔は何も解っていない。謝られた方がみじめになる事だってあるんだよ。

あいつはどうして解らないんだろう。あたしの気持ちの3分の1でも解ってくれればこんなに腹が立つこともないのに。

あんな奴もう知るか！

啓輔　？

聡美さんからメールの返信はなかった。
昨日も何度も電話をしようか迷ったのだが、結局出来ないまま月曜日の朝を迎えてしまった。

ドアを開けるのが恐い。聡美さんはまだ怒ってるのかな。

「どうかしたんですか？」
俺が入るのを躊躇していると、篠原さんが不思議そうな顔で訊ねた。
今日もいつものように護衛を兼ねて一緒に出勤しているのだが、篠原さんと一緒にいることも躊躇する原因の一つだ。
「い、いや。なんでもないよ」
そう言って笑顔を作るが、きっと空笑いだ。
篠原さんに気付かれないように小さく深呼吸して、ドアを開く。

「おはよう」
予想に反して聡美さんはにっこりとほほ笑みながら挨拶した。
「おは、よう」怒ってないの？ついぎこちなくなってしまう。
「おはようございます」
篠原さんも挨拶する。何も知らない彼女は普段通り可愛い笑顔だ。
「おはよう、知美」と返事をする聡美さんの顔を見てぞっとする。
背筋を冷たいものが走って身震いした。

聡美さんの様子はいつもと変わらない、と思う。なのに何でぞっとしたのかが自分でもよくわからなかった。
自分の中の何かが警告を発しているのかもしれないと思った。
やっぱり怒ってるのかな。

挨拶したきり、目線をパソコンに落として黙々とキーボードをたたく聡美さんから隠れるようにして自分のデスクへ向かうと、それに気付いた岩さんに肩を叩かれた。背中を丸めて泥棒のように歩いていた俺を訝しげに見つめる。

「よう、何かあったのか？」
「なんで？」
「いや、様子がおかしいから。お前は解りやすいんだよな」
ドキリと心臓が鳴った。岩さんの顔を見れない。
「何でもないよ」と言って平静を装う。岩さんとは付き合いが長いから、こんな演技で騙せるとは思えないけど。

う～ん。と唸る岩さんを後目に、俺は椅子にも座らず急いで準備をした。今これ以上追及されるわけにはいかない。幸い、というか何と言うか、今日から現場に出る為、岩さんの追及を受けることも、聡美さんと気まずい感じになることも、とりあえずは回避できる。
あとでちゃんと話をしよう。と心を決めて、そそくさとオフィスを後にした。

一等地に優々と立つタワーマンションはいつ来ても高級感に惚れ惚れする。いつかこういう所に住んでみたいと、思う一方で、自分

にはまるで縁がないと人生の不公平さにがっかりもする。

「聡美さんて、今日機嫌悪かったですかね」
現場に着くなり篠原さんは思い出したように呟いた。頃合いを見計らったのだろうか、わざとらしく言い出すものだから思わず「え？」と素で返してしまう。

「なんかいつもと違う気がしたんです」
「違うって？」
「う～ん。うまく言えないんですけど、さっき挨拶したとき、顔は笑ってたんですけど声のトーンが微妙に違うというか、何か冷たい感じがしたんですよね」

なるほど、さっきの違和感はそれか。と納得する。男の俺よりも女の篠原さんの方が聡美さんの変化を敏感に察知していたようだ。それは違う方向からも思い知らされた。なぜ聡美さんの様子がおかしいのか、原因は俺にあると篠原さんは読んでいたようで、それからしばらくしつこいくらいに迫られることになった。岩さんと同じ人種がここにもいることを俺はすっかり忘れていた。せっかく岩さんの追及をやり過ごしたのに、また振り出しに戻ってしまった。

なるべく仕事に集中することでなんとか追及をかわしてはいたが、彼女の辞書に諦めるという言葉はないらしく、朝から始まった質問攻めは、一旦静かになったものの帰りの電車の中で蒸し返された。

「教えてくださいよ。土日になにかあったんでしょ？」
もうはぐらかすのも疲れた、悪いけど無視させてもらおう。
「聡美さん、金曜日はすごく機嫌良かったし、ああこれは先輩とデートするんだなってすぐに解りましたよ。で、今日になったらアレでしょ？気になるじゃないですか」

目を瞑っておこう。無視だ、無視。

「先輩が何かしたんでしょ？」と言った篠原さんが、直後「あ」と声を上げて黙り込んだ。俺はしばらく目を瞑って平静を保っていたが、「あ」の意味が気になって薄眼を開けた。

横目でちらりと篠原さんの様子を伺うと、真剣に何かを考えているようで、目線を床に落としてあごに手をやっていた。

「何かしたんじゃなくて、何もできなかった。違いますか？」

突然耳元でささやかれて心臓が止まった。いや実際には止まってはいないのだが、一瞬本当に止まったのかと思うほど、ドキリと音を立てた。

耳元で声がしたからじゃなく、真相を突かれたからだった。彼女はもしかしたら岩さんよりも鋭いかもしれないと、冷や汗を感じる。

「わたしの想像ですけど、土日のどっちかにデートした先輩たちは、どこかで良い雰囲気になった。そこで聡美さんに迫られたりしませんでしたか？それを先輩が―」

「篠原さん」さすがにこれ以上黙っていられなかった。篠原さんの言葉を遮る。

「それ以上言わないでくれるかな。頼むから」

それは篠原さんの想像が正しいと認めることだ。それは解っていたが、野次馬的考えで色々と揶揄されるのはさすがに辛い。今の状況を作った原因が俺にあることも、また俺が悪いことも解っている。解っているから客観的にあれこれ言われたくはなかった。

篠原さんもそれ以上口を開くことはなかった。

気まずい雰囲気の中、電車は緩やかな加速と減速を繰り返し、目的の駅へと俺達を運んでいた。

聡美　？

「馬鹿」
「へ？」

ファミレスの一角で真理はあたしをしっかりと見据えて言い放った。
席に座った途端の一言目がこれだ。真理の隣では小学生に上がったばかりの心ちゃんが、意味も解らずに「ばか、ばか」と楽しそうに繰り返していた。

正直あたし自身もなぜ真理に馬鹿と言われたのかさっぱり意味が解らなかった。仕事帰りに久しぶりにご飯でも食べない？と誘われたときには、まさか一言目に馬鹿と言われるなんて思いもしなかった訳で、思わず素っ頓狂な声を出してしまった。

「話してごらん」
「何を？」
「なんかあったんでしょ？山田くんと」
「何で？」
「あんた今日何回携帯開いたと思う？あたし暇だったから数えちゃったよ」
真理に指を向けられて言葉に詰まる。今日一日の自分の行動を思い返してみたけど、携帯を何回確認したのかは覚えているわけもなかった。

「あたしが見ただけで8回。初めはメールしてるのかと思ったけど、あんた開くだけで何もしないで閉じてたでしょ、なんか気になる事でもあるのかなって思うでしょ、普通」
「時間を確認しただけだよ」と言い訳すると、真理は無言で左手を指差した。
あ、はい。腕時計してます。

「それに、山田くんの様子もおかしかったしね。知ってる？朝、山田くん逃げるように現場に出たの。あんた達の態度見て気付かない方が難しいよ」
真理の口から出た山田くんの名前に、隣でおとなしく話を聞いていた心ちゃんが素早く反応して「聡美ちゃん、ケイスケお兄ちゃんとケンカしたの？」と真理にではなくあたしに訊ねた。子供特有の鋭さ、とでも言うのだろうか、彼女の純粋な眼差しはまるで悪いのはあたしなのではないかと錯覚させる。

必死に笑顔を作る。林親子に睨まれてあたしの背中は悪寒と共に汗が滲んでいた。
「ううん、何でもないのよ」と心ちゃんに言い聞かせながら、小声で真理に「心ちゃんって超能力でもあるの？」と訊ねずにはいられなかった。
「さあね、でもたまに人の心を読んだかのように思った事を口にすることがあるから、もしかしたらあるのかもね。名は体を表すって言うでしょ？この子は名前の通り心に敏感なのよ」
真理はそう言ってニヤニヤといやらしい笑みを浮かべる。
まさか、と思いつつ心ちゃんの顔を見ると、じっと見つめる大きな瞳が、まさにあたしの心を見透かしているような気がして思わずぞっとした。この子がいる限り隠し事はできないと思わされる。

「―で？原因は何？」
林親子の追及についに耐えきれなくなったあたしがやけ食いという現実逃避に走り、山盛りのサラダを次々と口に入れ、バリバリと咀嚼していると、アイスコーヒーを飲みながら、冷ややかな目を向けていた真理がしびれを切らして口を開いた。
「―は？」あたしはフォークに刺したレタスを口に運ぶ途中の形で固まる。
「喧嘩の原因だよ。言ってごらん」
「別に、喧嘩したわけじゃ・・・」
「喧嘩じゃなくても、気になる事があるんでしょ？」
「それは、・・・そうだけど」あたしの言葉は語尾にいくにつれ声が小さくなっていく。
「心ちゃんの前では、話せない」っていうかホントは言いたくないんだけど。
「心はまだ小学生に上がったばかりだよ。大人の会話なんてまるで解らないんだから、気にしなくていいわ」
「いや・・・」無邪気にお子様メニューを頬張る心ちゃんが目に入る。「さすがに、まずいよ」とはぐらかす。

「あ、そ。じゃいいわ」真理はおもむろにバッグから携帯を取り出し「山田くんに聞くから」とタッチパネルを操作する。
「ちょっ」慌てて止めようとすると真理はにやりと笑ってわざと画面を見せながらコールを押した。画面には間違いなく『山田啓輔』と表示されている。
「わかった、わかったから、とにかく電話を止めて」
あまりにも焦ったあたしは自分が大きな声を出していることにも気付かず、一瞬のどよめきの後、周りの席から視線が集中するのを肌で感じで冷や汗が流れた。
「初めからそう言えばいいのよ」真理は電話を切り、携帯を左手に持ったまま、身を乗り出した。

こいつは周りの視線は気にならないのか？と長年の親友の神経を改めて疑い、店内の視線を一身に受けてあたしは身を縮める。まさに穴があったら入りたいとはこういう状況の事を指すのだと、身をもって実感した。

しかして、観念したあたしはこないだの事を話すしかなかったわけだが、全てを離す必要もないわけで、かいつまんで、啓輔の行動が怪しいとだけ話した。さすがに体を求められない、とは言えない。

真理はふ～ん、と鼻を鳴らすと、で？と言った。

「で？あんたは何を疑ってるの？」

「いや、それは・・・」

「言いたくない？」

「・・・うん」

「あ、そ」

自分から聞いておいて関心がないのか、真理はテーブルの上の紙ナプキンを取ると、食べ終わって満足そうな顔を浮かべる心ちゃんの口元を拭いてあげる。それがとても慣れた手つきで、あたしは思わず感心した。ちゃんとお母さんやってるんだ、と。

「なんだ、結局岩崎くんの言った通りか」

真理は心ちゃんの口を入念に拭きながら、ぽつりと零すように呟いた。

「え？」拓実がどうしたって？

「岩崎くん言ってたよ」真理は汚れた紙ナプキンをくしゃっと丸めてテーブルの上に置くと、すっかり氷の解けてしまったアイスコーヒーを一口飲む。

「『山田は何があっても聡美一筋だ。一途っていう言葉を通り越してバカの域に達するほどのな』って。あたしもその通りだと思う。山田くんは聡美以外の女のことなんて考えられる人じゃない。付き

合ってるとわからなくなるのかもしれないけどね。山田くんみたいな男は滅多にいないよ」

そんなこと、言われなくたってわかってる。でもどこか信じられない自分がいる。そのことが嫌な自分もいる。

啓輔を信じたい。
けど素直に信じられない。
この二つのせめぎ合いが、こないだの電話の一件から日増しに強くなって、あたしを苛んでいる。これは、もう自分ではどうしようもない。

「ま、でも疑ってしまうのもわかるよ。相手が本当に自分を愛しているのか知りたくなるのは、もう本能みたいなもんだもんね。」
真理はそう言ってしばし遠い目をしたかと思うと「そっか」と優しくほほ笑んだ。

「わかったよ。聡美も辛いんだねぇ」
「いや、そんなことは・・・」
「無理しなくていいから、あとはあたし達に任せておきなって」
「え？」
あたし『達』？『達』って何？

その瞬間、ニコニコとほほ笑む長年の親友の顔が、ほんの少し悪魔のほほ笑みに見えた事は、絶対に言えない。

啓輔　？

仕事は順調に進んでいた。依頼主がこっちの自由にさせてくれる人で、注文をつけられることもなく進められていることが一層仕事を早くしていた。本来の予定の１週間を待たずに、５日目にして、飯塚さんの仕事はほぼ終わりを迎えていた。
初日以降篠原さんがあれこれ訊いてこなくなったことも大きい要因として上げられる。

「この分なら明日には飯塚さんを呼んでも良さそうだね」
イメージボードと実際の内装を照らし合わせながら最終チェックをする。
「早く終わりましたね。これも先輩が手伝ってくれたおかげです」
と篠原さんにしては珍しく殊勝な事を言うので、思わずタブレット端末から顔を上げて篠原さんの顔を覗いてしまう。
「何ですか？」
「いや、素直だな、と思ってさ」
「もう、わたしこれでも先輩の事、尊敬してるんですからね」
篠原さんが嘘をつくでもなく嬉しい事を言ってくれる。こんなことを言われては顔がにやけてしまっても仕方がないだろう。
ありがとう、と言いかけると篠原さんは「仕事だけは」と付け加えた『だけは』の部分だけ強調して。
「前言撤回」
「はい？」
やっぱりこの子は裏表がない。まぁ、それがいい所でもあるんだけ

ど。

「なんだかんだで1週間なんてあっという間ですよね」

一階の広々とした神殿のようなロビーを歩きながら、ひとり言のように篠原さんが呟いた。ポツリと発した声は広いロビーを横断して壁を反射し、天井から吊り下げられた豪華なシャンデリアにぶつかって、雫となって降り注いだ。それは大理石の床を一歩踏むごとに響く高い足音をともなって、俺の耳に届く。

何気ない一言だったが、このロビーの一種の荘厳なイメージのせいか、もしくは俺自身が深い闇のように心に抱いていた為か、1週間という言葉が妙に胸に突き刺さった。

もう一週間も聡美さんと話をしていない。

そんなことは聡美さんと付き合い始めて以来、初めてのことだった。思えば喧嘩らしい喧嘩もした事がなく、よくよく考えてみれば、それすら聡美さんの寛容な心で許してもらっていたのではないか、と思った。

この半年、聡美さんは、何度か機嫌を悪くした。

初めのうちは電話をするのも気が引けて、聡美さんからかかってくるのを待っていただけだったが、そのうち「あたしからばっかりで啓輔から一回もかかってこない」と怒った。

二人でいるときに「手をつないでもいい？」と訊くと「わざわざ訊くな」と怒ったし、付き合いだして2カ月もすると「どうしてキスもしてくれないの？」とむくれた。

聡美さんが怒るたび、俺は軽い自己嫌悪に陥った。聡美さんが怒る理由はいつも普通のカップルならできて当然の事を出来ない俺のせいだったから。

こんなんじゃ聡美さんに嫌われてしまう。
俺はそればかり恐くて、聡美さんが怒るたび、謝った。
「ごめんね」と言うと、聡美さんは必ず「いいよ」と優しい笑みを浮かべて許してくれた。俺は聡美さんの「いいよ」が大好きだった。

今にして思えば、我慢していたんじゃないだろうかと思う。

自分から近付く努力を怠って、聡美さんの許しが出るのを待っているだけの俺を、聡美さんは寛容な心で我慢していただけで、我慢も限界が来れば爆発してしまう。喧嘩にでもなれば溜まった鬱憤を発散できるのに、俺とでは喧嘩にすらならなかった。俺の知らないうちに聡美さんは言いたい事を内にため込んでいたんじゃないのか？
俺はもっと早くそれに気付くべきだったのだ。

こないだの電話の一件。
人生に究極の2択があるとするなら、あの場面だったんじゃないだろうか。

間違った選択をした事で、聡美さんの我慢も限界を迎えてしまったのかもしれない。

「どうかしました？」
篠原さんの心配そうな眼で我に帰る。いつの間にか駅のホームに来ていた。また考え込んでいたらしい。具合が悪そうに見えたのだろう。

「大丈夫だよ。なんでもない」

ちゃんと謝ろう。

もう遅いかもしれないけど、ちゃんと聡美さんと話をして、ちゃんと謝る。もう聡美さんの「いいよ」は聞けないかもしれないけど、どんな答えでもしっかりと受け止めよう。全て俺が悪いんだから。

聡美　？

思えばもう1週間も啓輔と話をしていない。
空の啓輔のデスクが狭いオフィス内にぽっかりと穴を開けている。
啓輔のいない穴は日を追うごとに広がり、寂しさが増していくような気がした。

話をしたければこっちから連絡すればいいんだろうけど、その都度疑惑が頭をよぎる。

もし啓輔に他の女がいるんだとしたら。
それが知美だったら。
こんなに寂しい思いをしてる事がバカみたいじゃないか。と開いた携帯を閉じる。
ため息が出てしまうのは、この際仕方がない。

「またやってる」
顔を上げると、パソコンの画面越しに真理が見下ろしていた。
「連絡してみればいいのに」
「・・・うるさいな。何か用？」
こないだの話以降、真理は拓実と二人で何かを企んでいるようだった。真理も拓実も、気にしてくれるのはありがたいんだけど、正直ありがた迷惑っていう言葉を覚えて欲しいと思う。
「見てわかるとおり、暇なのよ」
真理は見てみろと言わんばかりに大げさに手を広げて、室内を見渡

す。
確かに、毎年の事とはいえ、秋口のこの時期はがっくりと依頼が減り、暇を持て余すことが多い。今現在まともな仕事があるのは啓輔と知美くらいなものだった。

「で？暇なあんた達は仕事中に何をしてるの？」と冷たく睨みつける。
やる事がないのなら、自分で仕事を探すのが社会人として当たり前のことだ。そして、それをやろうとしない者を叱るのもあたしの仕事の一つ。

「聡美達の事を思って、あたし達は計画を練ってるんだよ」
付き合いが長い分、真理はあたしの冷たい視線にもひるむ様子がなかった。それはそれで困ったものだと、あたしは目を伏せるしかない。
「計画って何よ」と訊ねると、真理は数枚の紙の束を寄越した。

『企画書』と丁寧に作り上げた書類には

・第一項　山田くんの気持ちを測る為に。と書かれている。

「何これ？」
「見ての通り企画書だよ。山田くんの愛の深さを測る計画の」
得意げに鼻を高くする真理の後ろで、椅子に座ったままの拓実がニヤニヤと笑っているのが見える。
まったく、今週ずっと静かだと思っていたら、二人でこんなことを考えていたのかと、あたしは呆れてものを言えなかった。

「大の大人が、子供みたいな事してないで仕事をしなさい」
「仕事はちゃんとしてるよ」と次に寄越したのは、丁寧に作りこま

れたチラシと、いつの間にか取りつけてあった雑誌社との共同企画だった。
さすがにこんなものを寄越されては何も言えない。ただ遊んでいるわけでもなさそうだと、あたしは困惑と喜びの入り混じった顔をした。きっと真理から見れば、変な顔だったに違いない。
「とりあえずそれ、読んでみてよ」
去り際にニヤリと笑う真理は、やっぱりどこか楽しんでいる節があって、何か釈然としない。こんなもの、と書類トレイの上に無造作に重ねる。読むもんか、と。

室長と言う役職がら、みんなに仕事をしろと言ってはいるが、それでも仕事がないのが現状で、大手から中小企業までいたるところに売り込みをしてみてもなかなか依頼を取ることができず、気がつけばオフィス内には陰鬱な空気が漂っていて、妙な息苦しさを覚える。これはあれだ、天気が良くないせいだと、太陽を覆い尽くすドロドロとした雲を睨んでみるが、それ自体がなんの解決にもならない事を知ってもいる。

そう言えば、去年の今頃の啓輔はのぞみの事が好きだと思ってたんだよな。と不意に今はいなくなってしまった仲間を思い出した。

木ノ下のぞみは去年の9月までうちで働いていた、オフィスパレットの元エースだった女の子だ。
啓輔と同じ時期に入社した彼女を同い年の啓輔はずいぶんと意識していて、彼女が大手に引き抜かれた時の啓輔の落胆ぶりは見ていられないほどだった。

『俺、たぶん木ノ下さんの事、好きなんだと思うんです』と打ち明けられたのは、いつの頃だっただろう。耳に張り付いたセミの声か

ら察するに夏ごろだったかもしれない。

空を蠢く黒々とした雲を眺めていると、気分までもが黒々と変色してくような錯覚に陥る。どうして今こんなことを思い出しているんだろう、と疑問が浮かんだ。啓輔に想いを打ち明けられた時に少しだけ胸が痛んだのを覚えている。あの頃は久しぶりに自分の内に訪れた感覚を信じられずに気付かないふりをしていたんだと思う。

あたしは無意識に書類トレイの一番上に置かれた紙の束を取り出していた。

『企画書』とキレイにタイプされた紙をめくる。

・第一項　山田くんの気持ちを測る為に。

『山田啓輔（以降、対象を乙とする）と言う人物の気持ちを測る為には、乙の人物像を理解しなければならない。（事項より、岩崎拓実による乙の分析を表記）』

企画書というよりも、どこかの研究レポートのような作りに思わず吹き出してしまう。

興味に駆られてあたしの目は次々に文字を追う。

生年月日から、年齢、身長、体重。さらには両目の視力まで書いてある。一体どうやって調べたのかと、向かい合って座る拓実と真理を交互に見るが、拓実ならこの辺の事は熟知していてもおかしくはないと、納得する。

さらに読み進めると、啓輔の歩んできた歴史が書かれていた。その中に『女性恐怖症』という文字を見つけてハッとする。

目の前が暗くなって、あたしは瞬時にその場所へと移動した。パ

レットが入っているビルの前。暗い夜道を照らす街路灯。静けさの中に場違いな声を響かせるアブラゼミ。そして、あたしの横で俯き加減で座る啓輔。

『俺、子供の頃から女の子が怖くて、高校出るまで女の子と喋ったことなんて数えるほどしかないんです。』

啓輔が弱弱しい声で打ち明けた自分の過去。

あれは啓輔がのぞみの事が好きだと打ち明けた時と一緒だったのではないだろうか？

啓輔は本当は話したくはないであろう自分の暗い過去を包み隠さず話してくれた。あの時全てを話した啓輔は『室長には、なんでも話せる気がします』と笑ったじゃないか。

実際啓輔のその言葉が嘘じゃない事をあたしは何度も実感したはずだ。

あたしから想いを伝えた時、啓輔はまだ自分の心にあるものがわからないと言った。

「恥ずかしい話ですけど、ホント言うとよくわからないんです。俺はずっと木ノ下さんが好きだと思ってたんです。でも木ノ下さんといる時と、聡美さんといる時では何か違うんですよね。心臓の動き方が違うというか、うまく言えないんですけど、でも嫌な感じじゃないんです。この気持がわかるまで、少しだけ待ってくれますか？」

申し訳なさそうにそう答える啓輔が、本当に真面目な人なんだと思って、あたしは「いいよ」と言った。久しぶりに好きになった人が誠実な対応をしてくれたことが嬉しかった。

啓輔と付き合いだして初めの頃、久しぶりに男と付き合うあたしが真っ先に気にしたのは、やっぱり年齢だった。

「こんなに年上でホントにいいの？」と訊ねると啓輔は「何言ってるの？」と不思議そうな顔をして「俺は、女の子と付き合いたいんじゃないんだよ。聡美さんと付き合いたいんだ」と言った。嘘を言っているはずがなかった。だって言いながら啓輔は顔を真っ赤にしていたのだから。

いつだって啓輔の口から発せられる言葉に嘘は一つもなかった。
あたしは啓輔の事が好き。
啓輔もあたしの事が好き。

この半年は二人で同じ道を歩いてきたはずだった。街路灯が照らす見通しの良い一本道だったはずなのに、いつの間にかあたし達の間に中央分離帯が出来て、啓輔は反対側を歩いている。この分離帯を作ったのはまぎれもなく、あたしの方だ。向こう側の啓輔を見れば、もう一人のあたしと手をつないで歩いている。じゃあここにいるあたしは誰？

『いつも変わらなくてこそ、ホントの愛だ。一切を与えられても、一切を拒まれても、変わらなくてこそ』
若い頃に呼んだゲーテの詩集の一文を思い出す。

啓輔は変わってない。
きっと変わったのはあたしの方。
啓輔の愛を素直に信じられないあたしは、きっとあのどんよりとした雲のように、暗く濁ってしまっているんだ。

真理達の作った企画書を閉じて書類トレイに戻した。これ以上読んでも仕方がない、とゆっくりと背もたれに寄りかかる。時計の針は丸い時計盤を貫くようにまっすぐに伸びていて、外を見れば眼下に広がる公園のオレンジの明かりが風で揺れる木々の隙間から洩れ

ていた。
まだ６時なのに真っ暗なんだ、と反射的に卓上カレンダーをみる。
季節は秋。１０月も終わりを迎え、１１月になればあたしはすぐに
また一つ歳をとる。

また啓輔との歳の差が少しの間一つ広がる。

啓輔　？

「じゃあね、お疲れ様」と篠原さんに挨拶をして俺はいつものアパートの近くの駅よりも2駅手前で電車を降りた。

飯塚さんの家の仕事が今日で終わり、これで篠原さんのサポートの仕事も終わった。

昨日、聡美さんにちゃんと謝ろうと決めたときから、今日はこの駅で降りると決めていた。来週の聡美さんの誕生日にあげるプレゼントを選ぶ為に、いつも降りる駅よりは、この駅の方が都合が良かった。

「聡美さんが許してくれなかったら、意味ないんだけどな」
ホームを歩きながら、まるで意味のない事をしているような気がして少し可笑しかった。
若干高揚した気持ちを落ち着かせながら、足は浮ついていた。

プレゼントは何が良いだろうと、色々なお店を回りながら考えている時間はとても楽しくて、ついつい時間を忘れてしまう。ほとんど無趣味と言っていい俺は、自分自身の買い物すらロクにしないので、簡単には決められなかった。
雑貨屋に寄っては、迷い。
某有名ブランドの服を見ては、迷い。
聡美さんに似会いそうな靴を見ては、迷い。

結局決まらないまま2時間ほどあちこちの店を出入りしていると、道の反対側に時計屋が見えた。
いつも時計をしてるから、腕時計にしようかなと、恐る恐る入ってみる。高級時計ばかりを扱った、少し敷居の高い店だったが、せっかくの誕生日プレゼントだから少しくらい高くてもいいか、と高をくくった。
店内は煌びやかな照明が整然と並べられたガラスケースを照らしていて、安物のジャケットで来てしまった俺を無言で圧迫しているような気がした。

「いらっしゃいませ、何かお探しですか？」
黒スーツの女性店員が物腰穏やかに訊ねてくる。こんな格好でも一応客として認めてくれたようだ。
「あの、誕生日プレゼントなんですけど、いつも腕時計をしてるので、時計にしようかと・・・」
何と言ったらいいのか解らずに言葉尻がすぼまる。何か情けないな、と自分が恥ずかしくなった。
「お相手は女性ですか？」
「あ、はい」
それでしたら、と店員に連れられるまま向かった先のガラスケースには、スイスの腕時計職人が作った有名な時計が並べられている。時計の脇に置かれた小さなプライスカードを見て声を失う。正直、桁が違う。
「あの、さすがにこれは・・・」高すぎます、とは言えなかった。
「でしたら―」と、店員は俺の財布事情を察知したにも関わらず、卑下するでもなく、あくまで物腰は穏やかに次々と時計を勧めた。
コチラは女性の方に人気がある、と勧められた時計は、確かに可愛かったけどやっぱり高すぎる。
コチラはちょっとしたプレゼントに人気です、と勧められた時計は、

値段は割と安かったが、デザインがあまり聡美さん向きではなかった。

あれこれと店員に従うまま店内を縦横無尽に歩き回り、３０分ほど経った頃に俺は一つの時計に目が止まった。
フランスの有名ブランドの時計にしては、割合安く、四角を基調としたデザインといい、薄いピンクの文字盤といい、聡美さんに似会う気がした。割合安いといっても、俺の財布事情ギリギリのラインだけど。見た瞬間にこれだと思った。

色々勧めた結果、なかなか決まらない俺に店員も少し頭を悩ませていたのか、これを見せて下さい、と訊くと、その時だけ店員の顔に光がさしたように明るさが増したような気がした。
どうぞ、と渡された時計を手に取ると、見た目より軽くて、手のひらの上でふわりと浮くような感覚だった。

「初めてのプレゼントにこの時計はおかしいですかね？」
その時計は気に入ったものの、プレゼントとしてはどうなのか自信がなくて、つい店員に訊ねてしまう。黒スーツの店員は、やはり物腰穏やかに柔らかい笑顔を作ると
「コチラの時計をプレゼントなさる方はあまりいませんね」と言った。
ずいぶんはっきり言うな、と驚いていると。店員は「ですが」と言葉をつづける。
「私は、好きですよ」とその時だけ親しみやすい笑顔を見せた。

その言葉は、全然説得力もなかったし、売る側としては気のきいた台詞でもなかったが、ほんの少しだけ背中を押された気がした。
女性店員がその時だけ見せた笑顔が、それ正解ですと言っているような気がしたのだ。

「じゃぁ、これください」

今日は見るだけのつもりだったのだが、勢いで決めてしまった。それでも後悔はなかった。商品はその場では受け取らず、聡美さんの誕生日まで店に預けることにした。

外に出ると、昨日とは打って変わって晴れた空に半分だけの月がぽっかりと浮かんでいて、なんとなく気分が良かった。

少しでもこの気分を長く味わいたくて、二駅分を歩いて帰る事にする。体の内側から駆けだしたい衝動が湧いてくる。楽しくて仕方がないと言ってもいい。

初めてあげるプレゼントを聡美さんは喜んでくれるだろうか、どうやって渡そうか、などと考えていると二駅分の距離なんて目と鼻の先のような気がした。

聡美さんが許してくれなかったら、とは考えなかった。考えないようにしていたのかもしれない。だって空にはキレイな月が浮かんでるし、足はこんなにも軽い。悪いことが起こるはずなんてまるであり得ないと、信じられた。

アパートが近くなるとますます気分が高揚した。この気分のままなら久しぶりに聡美さんに電話できるかもしれないと、自然と足早になる。

聡美さんは「いいよ」と言ってくれるだろうか。ちゃんと話をすればこの1週間感じていた黒いものを取り払うことができるだろうか。お寺の角を曲がると、後は一本道だ。

急に足が空回りしたような感覚に襲われた。目の前がフラッシュが炊かれたように白くなり、少し遅れて後頭部に激痛が走る。訳も

わからないまま出した足は地面を捕えることなく、俺は倒れていた。
何が起きたのか考える間もなく、2度、3度と体を鈍い痛みが襲う。何か固いものを叩きつけられているとわかった時には俺の目は異様な光景を捕えた。
街路灯に照らされて真っ黒になる人のシルエット。手を高々と上げて何かを振りかぶるその姿はなぜか俺の頭に『ムンク』の代表的な絵画を思い出させた。男が橋の上で叫ぶ、あの絵だ。

なんだこいつは？
暴漢？通り魔？などと目まぐるしく思考は回る。その間もそいつは「お前がいなければ！」とぼそぼそと呟きながら、なお殴る事を止めない。声の感じから男だとわかった。
俺は抵抗することもできず、体を丸めた。せめて頭だけは守ろうと、両手で頭を抱え込むと、右手にぬるっとした暖かな感触があった。

どれくらい殴られただろう、ひどく長い間のようにも感じるし、ほんの一瞬の出来事のようにも感じる。体中のいたるところを殴られたのに、不思議と痛みは感じなかった。ただ寒かった。
男はまだ殴っているのだろうか？それとも、もう止めたのだろうか？
俺はまだ生きてるのか？
それとも、もう死んでしまったのか？
それすらわからない。

呼吸をしてみる。鼻はなぜか詰まっていて苦しかったが、口からなら何とか呼吸ができる。ああ、まだ生きてるんだと、わずかながら安堵した。
何とか薄眼を開けると街路灯の明かりがぼんやりと見える。男の姿はどこにも確認できなかった。
嵐が去った後に「あれは嵐だった」というほど滑稽な事はない。
今の俺はまさにそんな感じだった。「あれは、通り魔だった」と今

さらながらに思った。

とにかく誰かに連絡をしなきゃと、薄れ行く意識を何とかつなぎ止めて、ポケットの中の携帯を探る。気に入っていた安物のジャケットはあちこちが破れて、土埃にまみれていた。右手に携帯が触れる。壊れていないか心配だったが、取り出すとちゃんと画面は明るく点灯していた。

安心すると途端に気が遠くなる。どのボタンを押したのか解らない携帯からは誰かの声が聞こえていた。

「おう、山田かどうした？・・・おい？」

なんで痛くないんだろう？最後に浮かんだ疑問も、目の前をテレビが消えるように暗闇がやってくると同時に消えてなくなった。

「・・・啓輔？おい！・・・啓輔！」

聡美　？

ソファに腰を落ち着けて、時計を見る。
２２時前に全てを終わらせるのはもう習慣になっていて、かかってくるはずのない携帯を前にして、すこしソワソワしていた。

ただつけただけのテレビからは長寿クイズ番組の特徴的な音楽が聞こえていた。子供の頃、この番組の名物ＣＭの曲をよく真似していた事を思い出す。ハワイだかどこかにあるという木を映しただけのＣＭだ。大人になればあの木が何なのかわかるものと思っていたけど、三十三になった今でも、あの木は何の木なのかわからないままだ。

あの木に限らず、子供の頃は大人になればなんでもわかるのだと信じていたけど、大人になってもわからない事ばかりだと嫌でも気付かされる。最近はその最たるものだと、無意識に笑いがこみ上げた。

啓輔の事がわからない。拓実や真理が何を考えているのかもわからない。
それだけじゃない。自分の事もよくわからないし、ホラ、この番組が終わった後、次に何をやるのかもわからない。世の中わからないことだらけだ。

時計の針が２２時を指す。反射的に携帯に目が行く。かかってこないよと思いながらも、期待してしまう。

目を向けた先で思いがけず携帯が鳴ったものだから、思わず二度見してしまう。
一瞬、まさか、と疑うが携帯はせわしなく鳴り続けていた。

「もしもし！」相手が誰かも確かめずに飛びつく。
「聡美！」電話の主は拓実だった。
なんだ、拓実かと、落胆する。大げさに落胆する。
「何よ、こんな時間に」
「聡美、落ち着いて聞いてくれ」
拓実はひどくあわてているようだった。

「啓輔が、何者かに襲われた」
拓実は早口でまくしたてた。それがよく聞き取れなくて、あたしは拓実が何を言っているのか、よくわからなかった。

『啓輔が』反芻してみる『何者かに襲われた』
襲われた？どういう意味？

「おい、聞いてんのか？聡美！」
「聞いてるよ、何を言ってるの？よくわかんないんだけど」
「だから」拓実は少しイラついた口調で「啓輔が襲われたんだ、怪我して救急車で運ばれた」と自分自身も確認するかのようにゆっくりと言う。

声が出なかった。携帯を持つ手が徐々に震える。全身が脱力して携帯を耳に当てておくのも難しい。
「何、言ってるの？意味、わかんない」あたしは自分がさっきと同じことを言っていることすら気付かなかった。だってそんなの現実的じゃない。
「いいか？落ち着けよ」

頭の中でドンドンと大きな音が響いて、拓実の声がよく聞こえない。それが自分の心臓の音だと気付くと、めまいが襲ってきた。
「啓輔が・・・怪我？」
口に出して確認すると、急激に現実感を増していく。目の前がグルグルと回って吐き気がした。口に手を当ててこみ上げてくる酸っぱいものを必死に飲み込む。
「聡美、聡美聞いてるか？」携帯の向こうで拓実が怒鳴る。
「とにかくお前も早く来い。病院は―」

慌てて呼び出したタクシーは１０分と待たずに到着した。開いたドアに飛び乗り、病院名を告げる。必死に急がせて、タクシーは制限速度ギリギリであたしを病院へと運んでくれた。
ルームミラーに映る自分を見て、その時初めて自分が部屋着のまま出てきていたことに気付いた。グレーのスウェット上下にすっぴんの女は、運転手には可笑しく見えただろうと、少しだけ恥ずかしくなったけど、今はそれどころじゃない。

病院に到着すると、千円札を3枚渡して、急いで救急用入口へと向かった。
「おねぇさん、おつり」と背後から声が聞こえたが、戻るのも煩わしかったので、いらない。と叫んだ。

中に入ると、薄暗く狭い待合室に拓実の姿があった。壁に寄りかかり腕を組んでいる。表情はいつになく険しく、雰囲気から瞬時に状況を理解した。
「・・・啓輔は？」
「・・・今処置中だ」
拓実はあたしを一瞥したが、すぐに処置室に視線を戻す。

暗い待合室は嫌に静まり返っていて、どうしようもなく不安を煽る。処置室のドアの隙間からほんの少しの明かりが漏れているが、あたしにはそれが救いの光には見えなかった。

「あいつから携帯に電話が入った」
沈黙に耐えかねたのか、拓実が静かに口を開いた。
「いつものバーで飲んでたんだ。時間は、9時半頃だったか。あいつから俺に連絡なんて珍しいなと思ってさ、出たんだ。何気なく」
あたしは黙って聞いた。頷きもしないで黙って拓実の顔を見る。
「出たんだけど、何も言わねぇんだよ。こっちが何を言っても聞こえるのは風の音と、うめき声だけだった。さすがに血の気が引いたよ。ただ事じゃないってな」
そこまで言って、拓実は思い出したように「他の奴らには連絡したのか？」と訊ねた。声が震えている。恐らく涙を堪える為にわざと平静を装って話をそらしたのだろう。それともあふれ出る怒りを鎮めるためだろうか。

「ううん、まだ」あたしも努めて平らかな声を出した。そうでもしないと、たちまちパニックが訪れる様な気がしたからだ。
「じゃあ、俺は林と大島に連絡するから、聡美はトモちゃんに連絡してくれ」
そう言って携帯を取り出す。かける前に、ここって携帯使っていいのか？と独り言のように呟いたが、まぁいいか、と携帯を操作する。
あたしも言われるがまま、知美を呼び出した。呼び出し音を聞いている間中落ち着かなかった。

知美に啓輔が怪我をしたと伝えると、にわかには信じられない事実に「嘘」であるとか「まさか」であるとか口にした後、恐らく無意識にだと思うが、小さく、しかしはっきりと「わたしのせいだ」

と呟いた。
何がわたしのせいなの？と訊ねる前に電話は切られた。「すぐに行きます」と最後に滑り込ませて。
電話を切るとすぐに拓実は横目であたしを見て「どうだ？」と訊ねた。顔は処置室に向いたままだ。
「うん・・・来るって」
あたしは知美の言葉が気になっていた。『わたしのせいだ』と呟いた彼女は啓輔がこうなった理由を知っているのだろうか？

ほんの少しの沈黙の後、金属の擦れるような音が室内に響いて、処置室から一人の看護師が顔を出した。
「山田啓輔さんの関係者の方ですか？」
看護師は義務的に声をかける。
「はい、そうです」と拓実が答えると、看護師は柔らかな笑顔を作り
「山田さん、気がつきましたよ」と言った。
その瞬間拓実の眉間に張り付くようにできていた皺がほどけた。恐らくあたしも同じような変化を見せていたんだと思う。つまり、安堵だ。
「どうなんですか？」
あたしは啓輔の容体を漠然と訊ねた。どのくらいの怪我なのかもわからないので、必然的にこんな訊き方になってしまう。
「頭部に裂傷があったため、少し縫いましたが、レントゲンにも異常はありませんし、体の方は骨折などは見られません。念のためこれから頭部のＣＴを取りますので、もう少しお待ちいただけますか？」
看護師の言葉はあたしの不安を取り除くのに十分な優しさと安心感を持っていた。白衣の天使とはよく言ったもので、その看護師はあたし達の前に現れた天使そのものだったのかもしれないとすら思っ

た。

しばらくすると、真理が文字通り駆け付けた。そのすぐ後には悟も来たし、知美は見知らぬ男性に支えられるようにやってきた。皆一様に心配し、焦りにも似た感情に若干取りみだし、あたしと拓実に詰め寄った。そして啓輔の容体を告げると、一様に安堵のため息を吐いた。

知美にさっきの言葉の意味を訊きたかったのだが、がっくりと肩を落とす知美に、常に寄り添うようにして見知らぬ男が張り付いていて、なんだか近寄りがたい。

何か、こんな時なのにあの二人妙にいい雰囲気醸し出してますけど。と、若干の腹立たしさを覚えたが、処置室のドアが開いた瞬間にそんなことは消え去った。

啓輔が出てきた。

両腕に松葉杖を携えてぎこちなく歩く姿が痛々しい。頭には包帯を巻いているし、右足にはギプスがはめられている。松葉杖を持つ両手はでっかい絆創膏が貼ってあるし、右目の上が腫れていて、充血している。黒のズボンには所々泥がついているし、羽織っただけのグレーのジャケットはいつも着ているものと同じとは思えなかった。

啓輔は待合室に集まったみんなの顔をゆっくりと見回すと、少し喋りにくそうに口をもごもごと動かした。

「ああ、みんなごめんね。心配かけちゃって」

「啓輔！」

啓輔の無事を少しでも近くで確認したくて駆け寄ると、啓輔はあたしの顔をみて、弱弱しく笑った。

「大丈夫？拓実から電話貰って、あたし、啓輔にもしもの事があったらどうしようかと・・・」

堪え切れず涙が出そうになる。こんなときにも心配をかけまいと優しくほほ笑む啓輔の笑顔が胸に痛かった。
「聡美さん、ごめんね」啓輔は小さく謝ると、恥ずかしそうに顔を少し赤くした。
「ホラ、来週聡美さんの誕生日でしょ？プレゼントをさ、見に行ったらその帰りにやられちゃった」
「バカ！」もうダメだ、目が熱い。
「そんなことの為に、もし死んでたら絶対許さないから」
みんなの前で泣きたくないのに、啓輔のほほ笑みは容赦なくあたしの心を覆い尽くす。

「無事で・・・良かった」今は、そう言うのが精いっぱいだ。
「ごめんね。心配かけちゃったね」
溢れた涙が、一粒だけ零れて、落ちた。

拓実と祥子（前書き）

いつものバーで
拓実と飲み仲間の吉田祥子が喋ってます

拓実と祥子

「んで？結局どうなったんだよ」
岩崎拓実は、いつものバーで、いつものマスターが作る、いつものお酒を飲みながら、いつもの相手の吉田祥子にストレートな質問をぶつけた。
祥子はと言うと、いつものバーに、いつものようにいる岩崎拓実が、いつものお酒を飲みながら、いつものように訳のわからない事を言っている、くらいにしか思っていない。

「何のこと？」と祥子は質問の意味は理解していたが、白々しく訊き返してみる。
相変わらず、マスターが作る『ドライマティーニ』はうまい。と本日二杯目のカクテルを飲みながら、そう言えば『マティーニ』の由来は、バーテンの名前だっけ？などと意味のない事を考えていた。

「篠原知美の事件だよ。お前もいたんだろ？その現場に」
「ああ、それね」
あの事件を思い出して、祥子は眉根を寄せた。そして可愛い後輩の身に降りかかった悪夢のような光景が眼前に広がって、さらに顔をしかめる。出来れば夢であって欲しいと、あれから何度思ったことだろう。と今は会社に姿を現すことのない可愛い後輩を思う。

「一応、解決したよ」と具体的な話をはぐらかす。
「一応とはなんだ、一応とは」
岩崎は納得いかない様子で祥子に詰め寄った。まるでくだを巻く酔

っ払いだなと、鬱陶しくなる。人が言いたくない事をむやみに訊き出すな。祥子は鋭く睨みを利かせた。
「な、なんだよその眼は」
祥子に睨まれて岩崎はわかりやすく狼狽する。どうやら祥子は人を怯ませる眼光を持っているらしい。それに気付いたのはいつ頃だったか、と記憶をたどってみると幼少の頃にはすでに友達だった男の子に『祥子ちゃん目が怖いよ』と泣かれていたなと思いだした。初恋の男の子に泣かれて、自分はきっと恋はできないと達観するに至った、あれは確か5歳の頃だ。

「最近トモちゃんがあからさまに気落ちしてる」
「へぇ」
祥子は平らかな声を出しつつ、岩崎がトモちゃんと呼ぶ篠原が気落ちするのもわかると思った。なにせ、自分のせいで大事な人物が今や意識不明の重体なわけだから。
「あの事件が関係してるんだろ？俺も多少の事情は聞いてる。お前は解決したって言ったよな。ホントに解決してんのか？だったらなんでトモちゃんは元気がなくて、山田はトモちゃんにつきっきりなんだよ」

そこまで聞いて、祥子はなるほど、と思った。岩崎が本当に訊きたいのは事件の真相ではなくて、後輩であり、大事な親友でもある山田の事が気がかりなのだろう。
そこで祥子はさらに推察する。前に岩崎がこのバーに山田を連れてきたときに、恋人ができた記念と言って祝っていた事を思い出す。そこでさっきの言葉だ『山田がトモちゃんにつきっきり』だと岩崎は言った。つまりあの事件のせいで気落ちした篠原を山田がなぐさめていて、それによって山田の彼女が不快を被っていると言いたいわけだ。

「事件は解決してる」と祥子はわざとぶっきらぼうに言う。
岩崎は、一瞬掴みかかってくるのではないかと思うほどの激昂を見せたが、すぐに表情を曇らせて「そうか」と一言だけ呟いた。

「ただ、あの事件のせいで三浦が怪我をした」
祥子はそう言って苦虫を噛み潰したように顔をしかめた。言いたくはない。自分でさえ出来れば夢であってほしいと思っているのに、口に出してしまうと認めざるを得なくなってしまう。三浦が帰ってこないかもしれないという事を。
だが、岩崎の山田を心配する気持ちを無駄にしたくはなかった。祥子にとって岩崎は親友と言ってもいい大事な飲み仲間だ。決して多くはない友達の思いに答えてあげたいと、祥子は話す事を決意した。

「やったのは篠原をストーカーしていた男であり、山田くんを襲った犯人でもある。確か飯塚と言ったか。三浦はあれで空手をやっているから、捕まえるのは簡単だとあたしも高をくくっていたんだ。それがいけなかったのか、最後の最後でへまをした。三浦が刺されたんだ。今は病院で意識不明だ」

「そ、」岩崎は口を開きかけて一旦言葉を止め、「・・・そうか」と目をそらした。

「―で？お前はそれを聞いてどうするの？」
真相を聞いてどうするのだ？と祥子は訊ねる。知りたかったのだ。岩崎が今後どうするのかを。祥子には聞く権利がある。それは岩崎にもわかっていた。

「わからねぇ」

岩崎は重い岩戸をこじ開けるように重々しく口を開いた。
「ただ、漠然と何とかしてやりてぇとは、思ってる。あいつらはホントに似会いのカップルなんだ。出来れば、幸せになってもらいたい」
岩崎は伏せ気味にグラスに注がれたウィスキーを見つめる。グラスの中で氷がからからと高い音を出して、揺れた。

祥子にはその姿が全てを物語っていると思えた。
祥子がなぜ岩崎と気が合うのか、それは岩崎が自分と同じ境遇だからに他ならなかった。
つまり、二人とも『恋が出来ない』のだ。

恋をしないわけじゃない。人を好きになれないわけじゃない。ただ『恋が出来ない』
同じ葛藤を持つ人間だからこそ、祥子には岩崎の想いも理解できた。せめて自分の大事な人には幸せになって欲しい。
それは祥子も同じだからだった。

「好きにすればいい。ただ、間違うなよ。お前の思いは時に人を傷つけることも、ある」
祥子はぶっきらぼうに言うと、ドライマティーニをのどの奥に押し込んだ。その時ばかりは飲み慣れたカクテルが妙に辛く感じた。

「ああ、わかってる」
そう言ってウィスキーを飲みこんだ岩崎も、苦々しく顔をしかめた。

拓実と祥子（後書き）

次から、また聡美と啓輔に戻ります

3日前　聡美

無意識に窓の外を見る回数が増える。
オフィス内を重苦しい雰囲気が包んでいるせいだ。それは知美のせいでもあり、啓輔のせいでもあり、そしてあたしのせいでもあった。

啓輔が怪我をした3日後、知美が初めて無断で休んだ。啓輔は『どうか怒らないでやって欲しい』と言ったきり、理由は教えてくれなかった。『そのうち篠原さんからきっと話してくれるから』と。自分自身もひどい怪我をしているにも関わらず、知美の事を心配した。

次の日出勤してきた知美は、別人のように塞ぎこんでいた。さすがのあたしもただ事じゃないとは思ったけど、本人が何も話してくれないので、何も手の打ちようがなかった。
それ以来、啓輔は妙に知美に優しい。何か理由を知っているからなのだとわかってはいるものの、やっぱりどこか腑に落ちない。

塞ぎこんだ知美。
怪我をしてる啓輔。
そして、機嫌の悪いあたし。
この3つが原因で陰鬱で、不穏で、暗黒な空気がオフィスに充満していた。

視線を机の上に戻すと、卓上カレンダーが目に入る。それを見てあたしの気分はさらに落ち込んだ。あと3日であたしはまた一つ歳

を取る。三十四だ。
時間っていうものは待ってはくれない。どんなに懇願しても絶対にペースを崩さない。残酷で、正確だ。あたしがどんなにため息をつこうが、どんなに抗おうが、あと８０時間ちょっとで、誕生日を迎える。
唯一、啓輔がプレゼントを用意してくれているということだけが救いだった。

やっぱり啓輔は変わっていない。
けど、今はあたしよりも知美の方にばかり気を寄せている。

「はぁ、寂しいんだなぁ」
「何が？」
無意識に出てしまった独り言を、よりによって真理に聞かれた。
さっきまでおとなしくデスクに座ってたくせに、何で独り言を呟いた時に限っているのよ。
「な、なんでも、なんでもない」
慌てて手を振る。あからさまに動揺しているな、あたしは。

「まぁ、わからなくもないけど」と真理は横目で啓輔をちらりと見る。見た後でニヤリと笑った。
「何よ、その目は」
「あたしちゃんと聞いてたんだよ。あの時病院で山田くんが言ってた事」
「な、何だっけ？」とぼけてみる。
「とぼけるなよ、あんたちゃんと愛されてるじゃん。良かったね」
そう言われると、まんざらでもなくて、あたしは自然と顔がほころんでしまう。

「そうそう、そういう顔してなさいよ。それでなくても何か雰囲気

悪いんだから。このままじゃそのうち部屋の隅にキノコ生えてくるよ」
「そう言えば、あんた達に考えてもらった『企画書』無駄になっちゃったね」
「ああ、あれ。あれはいいの」真理はそう言って、悪びれもなく「ただの遊びだから」と言った。
「山田くんのプレゼントって、なんだろね」
「何よ、急に」
「だって気になるじゃん。あの山田くんが愛する聡美にどんなプレゼントをするのか」
「声がでかいって」
啓輔に聞かれてるんじゃないかと恐る恐る覗くが、当の啓輔は気が付く様子もなく、黙々とキーボードを叩いている。ただ、あたしの焦りはピークだった。

「楽しみだよね？さ・と・み」
楽しんでいるのはお前だと、言ってやりたかったが、口には出さずに、手で追い払う。少なからず楽しみにしているのは、間違いではない。

これで、啓輔がちゃんと今もあたしの事を見ていてくれれば、文句はないんだけど。
そう思うのはわがままなんだろうか？

明かりを消して、ドアに鍵を閉める。室内と違い、外はそろそろ上着が必要なほど寒く、あたしは少しだけ身を震わせた。
乗りなれたレトロなエレベーターは例えるなら紳士的な老人だなと、いつも思う。古めかしい操作盤の割に、音もなく閉まるドアに、多少の億劫さも見せるがゆっくりと人を運ぶ仕草。到着と共になる

小さなベル音なんかは控えめで好感が持てた。

ロビーを出て、駅へと向かう途中でふと、啓輔の家に行こうかな、と思った。啓輔が帰ってからまだ間もないし、あの怪我ではご飯を作るのも、お風呂に入るのも一苦労だろうし、行ってご飯を作ってあげようかなと、唐突に思い立った。時計を見る。まだ２０時だ。今からすぐに行けば２０分くらいで着けるはずだし、たまにはあたしの方から行動しても罰は当たらないはずだ。
せっかくだからこっそり行って驚かせてやろう。
ちょっとしたいたずら心から、連絡はしないで黙って行くことにした。

それがいけなかった。思い立ったのがというよりは、ちゃんと来る前に連絡していれば、まだ良かったのかもしれない。
アパートを遠巻きに眺めながらあたしは茫然自失としていた。

アパートの前に啓輔がいる。
あの松葉杖姿は間違えようがない。その啓輔の胸に顔をうずめるようにして立っているのは、知美だ。

あたしはどこか、テレビを観覧する視聴者のような感覚で、立ちすくんだままその光景をボーっと見ていた。

アパートの前にある明かりがぼんやりと二人の姿を照らしている。
啓輔は全く動かなかった。
知美は小刻みに方を震わせている。泣いているのだろうか？

なぜ泣いているのだろう？
なぜ啓輔の胸の中で泣いているのだろう？
なぜ啓輔は知美に胸を貸しているのだろう？

見てはいけない、と頭の中で声がしたような気がしてあたしは目をそらした。
そのまま歩いてきた道を引き返す。なぜだか自然と早足になった。
こんなのって、ドラマとか小説とかの話で、何か現実的じゃない。
あれは、何だったのかな？

3日前　啓輔

篠原さんの落胆ぶりは見るに堪えなかった。
当然だ。何年も、何年も思い続けた人が目の前で刺されたんだから。
三浦さんはすぐに救急車で運ばれたものの、未だ集中治療室から出る事が出来ないでいる。当然、直接面会は出来ない。
だから彼女が泣いてしまうのは仕方がない。俺に出来ることはせめてその場にいた者として、彼女の悲しみをほんの少しでもわかってあげることくらいでしかない。

「ごめんなさい」
ハッと我に返ったように篠原さんは謝った。
「わたし、何やってんだろ。先輩に泣きついたりして」
「いいよ、辛い時は泣いたって良いんじゃないかな。泣いてすっきりするってわけにはいかないだろうけど、我慢してもっと辛くなるよりも、きっといい。でも最終的にはちゃんと信じてあげなくちゃダメだよ。自分と、三浦さんを」
篠原さんは目線を落としてはい、と呟くともう一度小さくごめんなさいと謝って、アパートの中へ帰って行った。
俺はと言うと、一応先輩面したものの、目の前で女の子に泣かれた経験なんかほとんど無かったためすぐには動けないほど緊張していた。

聡美さんは、あんまり泣かないからなぁ、と一度だけ目の前で見せた事のある聡美さんの涙を思い出した。

こびりつくような熱帯夜の中、声も出さずに涙を零した聡美さんを、思えばあの時初めて一人の女性と意識したんだった。尊敬する上司と、美しい女性。彼女の二面性に初めて気がついた、あれは暑い夏の日だった。

風呂からあがると、正面の鏡に自分の姿が映っていた。怪我をしてから5日が経ち、ようやくギプスをつけたまま風呂に入るのも慣れてきたが、鏡に映る自分の顔はまだ、見慣れない。右目の充血が取れないなと、顔を近づけると誤って体重を乗せた右足がズキンと痛んだ。

捻挫した右足をかばいながらソロソロと歩く。さすがに家の中では松葉杖は使えない。

慣れたとはいえ、何をするにも時間がかかってしまう。気がつくと22時を過ぎていた。

携帯の発信履歴から聡美さんを呼び出す。履歴に網羅された名前はそのほとんどが『聡美さん』だった。

いつもより若干長いコール音の後、「もしもし」と聡美さんの声がした。

「ごめんね、何かしてた？」

「ううん、そうじゃないよ」

電話越しの聡美さんは声の感じに抑揚がなく、元気がないようだった。

「どうしたの？何かあった？」
「うん？」と返事をした聡美さんは、次の言葉を繋がず、間をあける。少しして「なんでもないよ」とやはり抑揚のない声で答えた。時間にすればほんの1、2秒ほどだけど、俺はなぜだか重苦しい間に感じた。なんでもないと言うまでに何かを考えていたんじゃないだろうか。それは、俺に言えないことだったんだろうか。

もしかすると、あの時の事をまだ怒っているのかもしれないと思った。
あの時の事を俺はまだ謝れていなかった。怪我をした日以降、聡美さんは今まで通り優しくて、謝るタイミングを逃してしまったのだ。
どうやって切り出そうかとタイミングを計る俺と、気がかりがあるような聡美さんとでは、会話は続く事がなく、途切れ途切れになり、度々沈黙が訪れた。そのたび、何とか会話を続けようと話題を探す。

「そう言えば、今日あの時の事を思い出したよ」
「何？」
「聡美さんが初めて泣いた日の事」
それは、話題を探した結果に出た共通の話題のはずだった。俺にとっては何気ない思い出話のつもりで言った事だったのだが、聡美さんはそうは捉えなかったのか「何で？」と言った。
「何で思いだしたの？」
「え？」
「今日突然その事を思い出したのは、何で？」
聡美さんが何にこだわってそんなことを聞くのか解らなかった。詰問されているようで背中の毛が逆立つ。
「何って、別に理由はないよ。ただ思いだしたよって―」
「嘘」

それはとても冷たい声に聞こえた。
聡美さんは「嘘」と言ったきり口を開かなくなった。さっきまでの短いものとは違い、長くて胸を圧迫するような沈黙。
俺は何もしゃべれなかった。なぜ嘘だと思ったのか、意味もわからず、訊くこともできなかった。

しばらくすると、耳に押し当てた携帯から、空耳かと思うほど小さな声でゴメンと聞こえた。あまりに小さい声だったので反射的にえ？と訊き返すが、聡美さんはそこで突然明るい声を出して「今日はもう切るね。また明日、お疲れ様」と言って電話を切った。

規則正しい電子音を聞きながら一人部屋に取り残された俺は、何も理解できず、ただ茫然とするしかなかった。

投げ出した右足がズキズキと痛かった。

2日前（前書き）

聡美と啓輔と拓実と真理
全部短いものになってしまったので
一つにまとめました

2日前

2日前　聡美

今日は一日啓輔と目も合わせられなかった。
昨日の光景が頭から離れない。

知美が気落ちしているのは知っている。だから泣いていたとしても不思議はない。
でもなんで啓輔の目の前で泣いていたのか、それだけが引っ掛かる。

啓輔を信じたい。
でも疑ってしまう。

中央分離帯の向こうを歩く啓輔の隣にいるのは、ホントは知美なんじゃないか。
こっち側を歩くあたしのことなんか、気付いてもいないんじゃないか。

考えまいとすればするほど考えてしまって、仕事中も、帰って来てからも、頭の中はそのことでいっぱいだ。

考えすぎで頭が重くなってもまだ考えてる。自分が嫌いになりそうだった。

誕生日まであと2日。

気が重い。

2日前　啓輔

今日は一日聡美さんは目も合わせてくれなかった。
どうして急にそうなったのか俺には解らなかった。

あの時の事を怒っているにしては、態度の変化が遅い気がする。
なにか別の事で目を合わせたくない理由があるはずだ。

なんか急に二人の間に壁が出来てしまったようで、寂しかった。
でもその壁を作らせてしまったのはきっと、俺のせいだ。

理由が解らないのは俺が悪い。きっと考えれば理由が解るはずだ。

聡美さんの誕生日まであと2日。
なんだか気が重い。

聡美と啓輔の様子がおかしい。
今日は一日、話もしないどころか目も合わせないほどだ。

トモちゃんは朝から目を腫らしているし、とにかく室内の空気が
これでもかってくらい悪い。空気が悪いと気分も悪くなる。

聡美も啓輔もトモちゃんも、悪気がないのは解ってる。解ってはいるが、悪気がないでは済まないこともある。職場の雰囲気を悪くするのは、よろしくない。

帰りがけ、ロビーで林に呼びとめられた。林もやはり気になっているらしい。林がどうしてそんなに聡美の事を気にするのかは解らないが。

「聡美、おかしかったよね」
「山田もな」
俺は不機嫌を隠すことなく、言ってしまえば、忌々しげに言った。それはこないだ吉田に事件の真相を聞いたにも関わらず何もできない自分にも向けられた怒りだった。

「昨日はそんなこと無かったんだけどなぁ」
「昨日？昨日も似たようなもんだっただろ」
「違うんだよ。昨日は話をした時、聡美そんなに機嫌悪くなかったもん」
「じゃあなにか？昨日仕事が終わってから、今日来るまでの間に何かあったのか？」
「そんなこと、あたしは知らないよ」
林は俺の苛立ちをぶつけられて、不機嫌をあらわにした。不機嫌は人にうつる。だから職場の雰囲気が悪くなるのは嫌いなんだ。
俺は一つ深呼吸して、怒りを腹の底に沈める。

「悪い、ちょっとイライラしてた」
「別に、岩崎くんだけじゃないよ。きっとみんな何かしらの不満を抱えてる。口には出さないけどね」

「・・・だよな」
なんとかしてやりたいのは山々だけど、俺に何ができる？
「もうすぐ誕生日だって言うのにね」
「誕生日？誰の」
「ええ？岩崎くん知らなかったの？明後日聡美の誕生日だよ」
忘れてた。
「そうか、それだ」
「何が？」
「それしかねぇじゃん。誕生日」
「だから何が？」
「作戦名『誕生日』だ」
「だから、一体何が？」

前日　聡美

今日は朝から拓実と啓輔がいない。仕事がないからビラを持ってあちこち回ってくる、なんて言ってたけど、どうせロクでもない事を考えてるに違いない。まぁ、啓輔の視線を気にすることなく仕事に集中できたおかげで、だいぶはかどったから、よしとするか。

「じゃあ、お疲れ。聡美も早く帰んな」

真理は小さく手を振り、帰り際にウインクした。明日の誕生日に関する何かの合図のつもりらしかったが、あたしはそれどころじゃない。何せ今は啓輔の事を信じられないんだから誕生日も何もあったもんじゃない。

真理が出て行って室内にはあたしと知美の二人になった。

最近は定時ですんなり帰る知美が、今日は珍しく残っている。特に仕事があるわけでもないのに、と不思議に思い、じっと見ていると不意に目が合う。

「聡美さん」と呼ばれて体が強張った。

な、なんだ？やる気か？

知美はふらふらと立ちあがって近づいてくる。

なんだろう、宣戦布告でもされるんだろうか。

「やっと二人になれましたね」と知美は表情を変えずに言った。

「どういう意味？」
冷静に返しはしたが、内心はドキドキだ。
「わたし、ちゃんと聡美さんと話をしなきゃってずっと思ってたんです」
「な、何？」
「先輩の怪我の事」
「へ？」

あたしの心配をよそに知美はゆっくりと今までの事を話し出した。元彼のストーカー被害の事、啓輔に相談してずっと護衛してもらっていたこと。そのせいで知美と付き合っていると誤解されて襲われてしまった事。時々言葉に詰まらせながらも、止まることなく切々と。

「あの時、わたしのせいだと呟いたのはそういう意味だったんだ」
「あたしのせいで先輩にあんなひどい怪我させちゃって、わたし申し訳なくて」
「それで泣いてたの？」
思いがけず出てしまった言葉に自分で驚いた。しまったと思った時にはもう遅く、一瞬目を丸くした知美は「見てたんですか？」と申し訳なさそうに訊ねた。
「あ～、うん。見るつもりはなかったんだけど」
そのせいで今、疑心暗鬼です。
「そうですか、ごめんなさい。聡美さんの大事な山田さんをお借りしちゃって」

いや、そういう風に言われると、どう対応していいのか困るんですけど。

「わたし、好きな人がいるんです」

静かな室内にあって、知美の声はとてもか細く、耳を立てないと聞き逃しそうになる。

「でも、彼もわたしのせいで大きな怪我をしてしまって・・・」

聞けば、その彼はストーカーに連れ去られた知美を助けに行った際に刺されてしまったらしい。

あたしにはなんだか突拍子もない話に思えて、現実感はあまり感じられなかったが、話しながらもポロポロ零れる知美の涙がそれを真実だと伝える。知美は二十三にしてとんでもない現実にさらされているのだと思い知ると同時に、同情がこみ上げてくる。

そんなことになってるとも知らずに啓輔の行動が怪しいだの、知美と何かあるんじゃないかだの疑っていた自分が恥ずかしかった。

「どうしてそれを今話そうと思ったの？」

「最近、聡美さんと先輩が、なんかぎこちなかったから、もしかしたら疑ってるんじゃないかと思って」

見抜かれてた。若干二十三歳の知美にあたしの考え全部見抜かれてた。

穴があったら入りたくなるほど恥ずかしかったが、そこは堪える。

「そんなことないよ。ホラあたし明日誕生日でしょ？この年になると誕生日前はちょっと気が重くなるの」

一回り近く下の子に見透かされて動揺なんて見せられるものかと、

嘘をついた。
だって、なんか悔しい。あたしってそんなに単純なのかな。

「わたし、どうしたらいいんですかね」
しばらくあふれる涙をティッシュで拭っていた知美は、俯いたままポツリと呟いた。
「三浦くんの怪我も、先輩の怪我も、みんなわたしのせいなんです。わたしが巻き込んだから・・・」
ようやく止まりかけた涙が知美の大きな瞳からまた、あふれ出す。
きっと啓輔が怪我した後からずっと悩んで、そして立て続けに好きな人が怪我をして、さらに自分を追い込んで、毎日のように泣いているんだと思った。不安で、苦しくて、突きつけられた現実に押しつぶされそうになるたびに自分を責めているのだろう。

「知美。うぬぼれちゃダメだよ」
あたしはティッシュ箱からティッシュを2枚取り、知美の涙を拭いて、顔を上げさせた。
「啓輔も、知美が好きな彼も、きっと知美のせいだなんて思ってないよ。きっかけは確かに知美が相談したからなのかもしれないけど、知美を助けようと思ったのは彼らの意思なんだから、怪我をしたのも自分のせいなの。知美がいくら自分を責めても彼らは喜ばないよ。今知美に出来ることは自分を責めることじゃなくて、知美自身がしっかりすることじゃない？」
あたしにはストーカー被害を受けた経験もなければ、大事な人を自分のせいで大けがさせたと悩んだ経験もない。だからあたしの言葉がどれほど知美の心に届くのかは正直解らないけど、今あたしが言えるのは年長者としての最低限の励ましだけだ。
「その人の事好きなんでしょ？だったらちゃんとお見舞いに行って、

しっかりお世話してあげなさい。塞ぎこんでたって何も始まらないよ」
そう言って肩を叩くと、知美は真っ赤に腫らした目を細くして、はい。とほんの少しの笑顔を見せた。

知美が帰った後の誰もいなくなった室内で、あたしは椅子に座ったまま天井を見上げていた。
なんだったんだろうと、この数日の疑心暗鬼がとてもバカらしいものに思える。

現実ってこんなものなんだろうか。
あの時の光景がドラマとか小説とかだとその後の展開は、相手の女が、今回で言えば知美が先輩はあたしのものだ。とか、開き直った男が、今回で言えば啓輔がお前にはもう飽きたんだよ。とか言って、哀れな年上女は物語から消されてしまうものだろうに。

あたしの話をもし物語にしたとしてもきっと誰も読まないだろう。
だって、こんな拍子抜けな話、3流以下じゃないか。自分でも笑ってしまうほどの、なんて間抜けでバカな物語。

でもいいや、なんだか気分が軽いから。

「さて、帰るか」
明日は誕生日だ。気が重くて、少しだけ楽しみになった。

前日　啓輔

「作戦名『誕生日』だよ」
岩さんは喫茶店のテーブルに乗り上げるように顔を近づけて力強く言った。
「え？」

朝出勤すると同時に外に連れていかれて、何も解らないままビラを配らされて、休憩に寄った喫茶店でさらにわけのわからない事を言われて俺の頭には『？』マークが並んでいた。

お昼を少し過ぎた店内は、ついさっきまで忙しかった事を示すように、片付けが間に合わない空いたお皿があちこちのテーブルに乗ったままで、店員がせわしなく片付けに追われている以外はほとんど客の姿もなく、だから岩さんの声が大きくても誰も見向きもしない。

「お前ら最近おかしいだろ。何かあったんだろ？」
椅子に座り直してコーヒーを飲みながら、岩さんの声はどうしても大きい。
「別に、何もないよ」
「そういうの、いいから。お前らはわかりやす過ぎんの」

そう言われてしまってはぐうの音の出ない。なんか悔しいけど。
「具体的に何があったか、なんて訊かねぇよ。そんなことはどうで

もいいしな。お前が困ってるんじゃないかと思っただけだ。どうなんだ？」
「困ってると言えば・・・」困ってるけど、それを言ってどうなるんだ？

俺自身どうして聡美さんの様子がおかしいのか解らないのに、それを岩さんに話したところでどうにもならないだろう。

「明日、聡美の誕生日だろ？」
「うん」
「そこで、作戦名『誕生日』だ」
「さっきからそれ、なんなの？」
「お前、当然プレゼントは用意してるよな？」
当然と言われてドキリとした。用意している事はしてるけど、受け取ってくれるかどうか解らないのに。

「一応、用意は、してる、よ？」不自然にしどろもどろになってしまう。
岩さんは、よし、と言うと一層身を乗り出して「お前に良い事を教えてやる」と不敵な笑みを浮かべた。

「一つはっきりしてる事は、お前は浮気はしないと言うことだ。だよな？」
「するわけないじゃん」
「そうだ。するわけないんだ。でもたぶん聡美は疑ってる」
「ええ？」寝耳に水だ。どうしてそうなるんだ？
「お前は自覚がないかもしれないけどな、はたから見てれば一目瞭然だ。お前はいつもトモちゃんと一緒にいるし、聡美としては面白くないよな」

「それは・・・しかたないよ。最近まで仕事で一緒だったんだし」

その後も、あれじゃほっとけないし・・・

「まぁ、俺も大体の事は聞いてるよ。でも聡美は知らない。だろ？考えても見ろよ、自分の彼氏が他の女の事ばかり気にかけてるんだぞ？気にならない方がおかしいだろ。『啓輔はどうして知美の事をそんなに気にするんだろう』『もしかして知美の事が好きなんじゃないかな』と、そうなるわけだ」

そうなのか？聡美さんの様子がおかしかったのは、俺が篠原さんと一緒にいたせいなのか？それって、もしかして・・・

「俺、もしかして聡美さんの事、すごく傷つけたんじゃ―」

血の気が引く思いがして、手が震えた。知らず知らずに大好きな人を傷つけていたかもしれないという事実が目の前を暗くする。ドクンと心臓が強く動いた。胸が痛いと言うのは、こういうことなのかと思う。

「かもしれねえな。聡美は少なからず、山田の事を疑っては、いる」

真面目な顔の岩さんを直視できない。その目の向こうに聡美さんの思いがあるような気がした。

「でも、お前は浮気なんかしない。それは聡美も十分解ってる。だから何も言えなくてため込んでるんだと思うんだ。あいつ、何も言わなかっただろ？」

「たぶん。何も言われては、いないと思う」

気を落ち着かせようとコーヒーカップを取るが、手が震えてカチャカチャとうるさい。一口飲んだコーヒーはとても苦く感じた。

「落ち着けよ。お前は気が小せえな。大丈夫だって、まだ間に合う。

それどころか―」
そこで岩さんは声をひそめて顔を近づけると「一気にセックスまでいける作戦だ」と耳打ちした。

セッ？
突然何を言い出すのだと、長年の親友の顔をまじまじと見つめるが、岩さんはいたって本気の顔をしている。からかっているわけでも、冗談を言っているわけでもなさそうだ。

「お前ら、まだしてねぇンだろ？ああ、言わなくていい。見れば解るから」
「あう・・・」声が出ない。情けない。

「お前は、まぁその歳で初めて女と付き合うんだから仕方ねぇかもしれねぇけどな。聡美は、もういい歳だ。解ってはいるだろうが、それなりに色々経験もしてきてるだろうよ」

それは、解ってるつもりだ。聡美さんは俺と違ってちゃんとした恋愛をしてきてるんだし、一通りの経験はあって当然だろうとは思っていた。

「普通に付き合い始めて、半年以上も待たされてみろ、焦れるだろ普通」
「・・・そういうものなの？」
「・・・そういうものなのだ」

こういう時、恋愛経験のない自分が嫌になる。それが当然だと言わんばかりの岩さんを肯定することも否定することもできない。

「そこで、だ。今度の聡美の誕生日にお前から聡美を誘え『セック

スしよう』ってな」
「はぁ？」
「大丈夫だ、自然な流れで持っていけるように、俺が今日一日レクチャーしてやる。大船に乗ったつもりでいいぞ」
「それが、作戦名『誕生日』？」
「これが、作戦名『誕生日』だ」

いいのか？これで。
親友と言うか悪友と言うか、つまり岩さんの言葉を真に受けて、勝手に作戦名『誕生日』を決行させられようとしている。残念なことに、断るだけの言い分も正義もない俺には断る事も出来ない。

明日の聡美さんの誕生日が、少しだけ待ち遠しくて、少しだけ気が重くなった。

当日（前書き）

聡美と啓輔が交互に続きます

当日

聡美

いつになくすっきりと目覚めた。いつもは目が覚めた後も少しの間布団の中でゴロゴロしてしまうのが、今日は目が覚めてすぐに起き上がれたほどだ。

部屋の時計が１０時を指している。普段より3時間も多く寝られたからだろうか？

リビングへ行くとまずキッチンに置かれたコーヒーメーカーのスイッチを入れる。これがあたしの日課。仕事の日でも、休みでもまず朝一のコーヒーが無いと一日がすっきりしない。

ソファに腰をおろし、コーヒーが出来上がるまで携帯をチェックする。これも日課の一つ。昔に比べて着信もメールもだいぶ減ったけど、未だにメールをくれる友達も少なからずいる。まぁほとんどは啓輔から来てないかをチェックするだけなんだけど。

メール着信1件　啓輔からだ。

『おはよう。まだ寝てるかな？昨日言った通り今日の待ち合わせはお昼でいいよね？駅で待ってます』

メールを見て思わず顔がほころぶ。昨日までは今日と言う日を楽しみには思えなかったが、今は楽しみで仕方がない。

『おはよう、今起きたよ。今日はあたしの誕生日祝ってくれるんでしょ？楽しみにしてるね』
メールの返信を打ち、送信ボタンを押すと、キッチンでコーヒーメーカーが味気ない機械音を発しながら蒸気を噴き出した。
さぁ、まずはコーヒーを飲もうかな。

啓輔

メールを送信してベッドから飛び降りる。
昨日の定期通院でようやくギプスの取れた右足で着地すると、まだ少し痛かった。
カーテンを開けて朝日を部屋に取りこむと、ガラステーブルに光があたってキラキラと反射した。テーブルの上のデジタル時計は８：２０と表示している。休みだと言うのにあまり寝られなかった。
眠い目をこすりながらポットに水を入れ、火にかける。朝一でコーヒーを飲むのが眠気を覚ます為の毎日の日課だ。お湯が沸くまでの間、聡美さんから教わったコロンビア産の豆をコーヒーミルに入れてゆっくりと挽く。初めは面倒だと思った手動式コーヒーミルも、最近はすっかり慣れて、ガリガリと豆を粉砕する音が妙に心地よくもある。
カップに注いだコーヒーをガラステーブルに置き、携帯をもう一度開く。外を見れば一目瞭然だが、一応念のため天気を確認すると、今日は一日快晴らしい。

ホッと胸をなでおろす。昨日の岩さんの言葉が脳裏に浮かんだ。

『いいか？誕生日デートは全部お前が主導権を握れ。ただし予定は立てるなよ。あくまでさりげなく最終目的まで持って行くんだ』

岩さんの言う最終目的まで行くかどうかは別として、一応昨日の電話で今日は俺に任せてほしいとは言ってある。

天気が晴れなら、予期せぬ出来事に慌てることもないだろう。

まぁ、全て岩さんの言うとおりにするつもりもないけど。

コーヒーを一口啜ると、口内に広がるコーヒーの香りがみるみる眠気を覚ましてくれた。

聡美

駅に着くとすでに啓輔の姿があった。服を選ぶのに時間がかかったが、腕時計を確認すると１２時ぴったりなのであたしが遅れたわけじゃなさそうだ。

「お待たせ。いつもながら早いね」

待ち合わせをすると啓輔は必ず早く来る。これはもう癖なんだなと気付いたのは何回目かの待ち合わせであたしの方が早く着こうと１５分前に待ち合わせ場所に行ったにもかかわらず啓輔の方が先についていた時だった。

「そんなに待ってないよ」

これも必ず言う。ホントは結構待ってるくせに。

「さて、まずはどこに行くの？」
今日一日何をするのかあたしは何も聞いていなかった。まぁ、あたし達のデートはいつもノープランだからいつもの事と言えば、いつもの事なんだけど。昨日の啓輔の話はあたしの気分を少しだけ高揚させるものだった。

「お昼だからね、とりあえずご飯食べようか？」
啓輔は眩しい笑顔を見せて歩き出す。
今日一日啓輔があたしをどうエスコートしてくれるのか、子供っぽくわくわくしながら後をついて行くと、珍しく啓輔の方から手を繋いできて少なからず驚いた。

「あたしは楽しみにしてて良いのかな？」少し意地悪く訊ねてみる。
「一応ね。でもあんまり期待しないでね」と、啓輔は困ったように笑った。

啓輔

『飯を食うなら、和食が良いぞ。周りが静かだから無理なく会話ができる』
と岩さんは言ってたけど、初めて入るこの店はあまりにも静かすぎて、今がホントにお昼時なのか疑ってしまいたくなる。席は結構うまってるのに会話があまり聞こえてこないのは不自然で、ぎこちなくなりそうだ。

「おいしいね。こんな店知ってたんだ？」
聡美さんも周りを気にしてか、少し顔を近づけて小声で話しかけた。
「いや、俺も初めてなんだ。どこが良いかなって、調べたらココが良さそうだったから」
失敗だったかな。緊張であまり味が解らない。
右手で箸を動かすたびに内ポケットの中に入っている物が当たるのも俺の緊張を否応なく誘う。待ち合わせ場所に行く前に受け取ってきた、聡美さんへのプレゼントだ。お店の好意でプレゼント用にキレイにラッピングされていた。おかげで動くたびにポケットの中で音がするんじゃないかと気が気ではない。

『プレゼントはギリギリまで見せるなよ。もらえるとは解ってても、こっちとしては切り札だ。そう簡単に見せるもんじゃない。効果的な場所で、効果的な演出をして出さなきゃダメだ』
そうは言っても岩さん。ずっと隠し持ってるのは心臓に悪いよ。

「どうしたの？おいしくない？」
俺の緊張を勘違いした聡美さんが心配そうな顔を見せる。
「あ、いや。煮物にしいたけが入ってるな～って」
あわてて取り繕う。顔が引きつっていないか心配だ。ちゃんと笑えているだろうか。
「しいたけ嫌いなんだっけ？」
聡美さんは、じゃあ、あたしが食べてあげるよ。と煮物の上に存在を主張するしいたけをひょいと箸でつまんで、口に入れる。
「ありがと」
「おいしいのに、しいたけ」
「ダメなんだ。しいたけだけは」
「好き嫌いは、いかんなぁ」
聡美さんが自分の事を棚に上げて意地悪く笑うので、負けじと言い

返す。
「自分だって嫌いな人参よけてるくせに」
「あ、ばれてた？」

聡美

全てを啓輔に任せたデートは新鮮で楽しかった。
お昼に食べた和食のお店はすごくおいしかったし、この歳では少し恥ずかしさを覚えるお台場の観覧車も、啓輔に連れてこられるとすんなり乗れた。当の啓輔はぎこちなさが見え隠れするものの、今日の為に色々調べたらしい片鱗が見えるたびに、あたしは嬉しかった。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、気がつけば太陽は姿を隠し、代わりに細い月が顔をのぞかせ始める。
今日はホントに楽しかった。久しぶりのデートもさることながら、啓輔の変わらない優しさを感じて、幸せだった。ただ一つ。この時間になってもプレゼントを渡す気配が無い事を除けば。
催促するつもりはないし、用意してなくてもそれはそれでいい。あの時『プレゼントを見に行った』と聞かなければ、こんなに気にする事も無かったんだろうけど。

「お腹空いたね」啓輔はお腹に手を当てて言う。
「そうだねぇ。いつの間にかもうこんな時間だし」
あたしの腕時計は１９時を指し、お腹の時計もそろそろ鳴りだす頃だ。

「じゃあ、行こうか」と啓輔は照れ臭そうに頭を掻くと、あたしの手を取り歩き出した。
「実はレストランの予約を取ってあるんだ」
今日の啓輔はホントによく出来てる。別人なんじゃないかと疑いたくなるけど、上から握られた手を指をからませるように繋ぎ直すと、途端に顔を赤くするからいつもの啓輔に間違いない。

海沿いのホテルの１２階にあるレストランは大きな窓からレインボーブリッジが一望できた。
空間に浮かぶように煌びやかにライトアップされた橋脚が夜空に二つの花を咲かせている。水面に反射したライトの数々がキラキラと、まるで星を散らしたように輝いて、普段何気なく見ているレインボーブリッジが今日ばかりは全くの別物に思えた。

「乾杯しようか」
食前酒のワインが注がれたグラスを啓輔は優雅に持ち上げる。
これは夢なんだろうか？
あたしは急激に失った現実感に少し戸惑いながら、つられるようにグラスを持ち上げた。
二人のグラスがほんの少し触れて、チン、と澄んだ音を立てる。
「聡美さん、誕生日おめでとう」

啓輔

夜景の見えるレストランは二人の雰囲気を自然とロマンチックに演出してくれた。
運ばれてくる料理はどれもおいしくて、会話も自然と盛り上がる。
『夕食はここがいいぞ』と、この場所を教えてくれた岩さんに感謝しなくては。

「何か、夢みたいだね」
食事が終わり、デザートの到着を待つ間、聡美さんは窓の向こうに見えるレインボーブリッジを眺めながら呟いた。
「何が？」
「ホント言うと、今日は何回か『こいつはホントの啓輔か？』って疑ったんだよ」
「何それ？ひどいなぁ」
冗談めかして顔をしかめると、聡美さんはごめんねと目を細めた。
「それだけ今日の啓輔は別人のようだったんだ。あたしなんかの誕生日をこんなに素敵に演出してくれるなんて思ってもいなかったから」
そう言って聡美さんは姿勢を正して、ありがとうと小さく頭を下げた。
思いがけない感謝の言葉に、顔が熱くなる。その一言が何よりの報酬だった。一日歩いて酷使した右足の痛みも忘れるほどの。

「なんかね、あたし思うんだ」
デザートの空き皿を片づけてもらい、何もなくなったテーブルの上で、ワイングラスをゆったりと回しながら聡美さんがポツリと呟

く。グラスの中で揺れる赤い液体を眺めながら、それはひとり言のようにも聞こえた。
「この世界に神様がいるとしてね？その神様が、あたし達の間にドラマを作ろうと、必死に意地悪してるんじゃないかって」
「ドラマ？」
「うん。こうしたら面白いんじゃないか？どうしたらこの二人を面白くできるかって、あれこれ意地悪するんだけど、あたし達はさ、こんなだからことごとく神様の思い通りにはいかないの」
聡美さんはバカみたいな妄想だけどね、と恥ずかしそうに笑った。
「あたし達二人じゃ、ドラマになんかなるわけないのにね」
「もしこの世界に神様がいて、俺達に意地悪をしてたとしても、俺は俺だし、この気持は変わらないよ。俺は聡美さんが好きだし、何よりも大切に思ってる」
それは俺の素直な気持ち。この気持だけは決して揺らぐことはない。今までにも何回も言ってきたし、この先もきっと何回でも言うだろう。
聡美さんは驚いたように一瞬体を緊張させると周りを伺うようにして「そういうことはさらっと言うんだよね、啓輔は」と恥ずかしそうに目を伏せた。
「うん、ありがと。嬉しいよ」
『効果的な場所で効果的な演出をして渡せ』
頭に岩さんの言葉が響いた。ここか？渡すタイミングは。

聡美

顔が熱い。絶対赤くなってる。
啓輔が突然変なこと言い出すからだ。
啓輔の素直さは時に恥ずかしい。なにもこんな所で言わなくてもいいのに。恥ずかしくて顔が上げられない。嬉しいけど。

「聡美さん」
不意に呼ばれて、恥ずかしさをごまかそうと慌てて顔を上げると、啓輔は何かを隠すようにテーブルの上に両手を置き、真面目な顔で見つめていた。
「これ、喜んでもらえるか解んないけど」とゆっくり手をどかすと、キレイにラッピングされた小さい箱が現れた。
「誕生日プレゼント。受け取ってくれる？」
スッとテーブルの上を滑らせて、あたしの前に箱を寄越す。
シルバーの包装紙に包まれた箱は細長くて、薄い赤色のリボンが結ばれていた。

「・・・開けていい？」
「どうぞ」

受け取った箱は小さく、あまりにも軽くてほんの少し力の加減を間違うと途端に壊れてしまうじゃないかと思うほど、それ自体がかけがえのない物に思えた。
ほどいてしまうのがもったいないくらい丁寧に結ばれたリボンをゆっくりほどいて、破いてしまわないように慎重に包装紙をはがしていくと、やがて見覚えのあるロゴが目に入った。
フランスの有名時計ブランドのロゴだ。

「これ・・・」
「聡美さん、いつも腕時計してるでしょ？だから時計にしてみたん

だ」
自分の手の中にある箱が信じられない。まさかと頭が否定を試みるが、この箱は確かにあたしの手の中に存在している。
「開けてみてよ。気に入ってもらえるかどうかは、解んないけど」
震えそうになる手を必死に抑えながら箱を開けると、まずあたしの目に飛び込んできたのは鮮やかな赤色をした革ベルトだった。クロコダイルのウロコ模様が特徴的だ。四角い本体はシルバーの縁どりに薄いピンクの文字盤が可愛らしい。12時と3時の所に小さいダイヤが埋め込まれていた。
「ちょっと、これ・・・高かったんじゃないの？」
一歩間違えば重くなってしまうプレゼントに思わず本音が出てしまう。啓輔は、そんなことないよと、あからさまな謙遜を見せたが、実際は相当したはずだった。
「気に入らなかったかな？」
驚きのあまり声も出ないあたしを、不安そうに見つめる。
「そ、そんなことないよ。すごく嬉しい」
気に入らないはずがない。これは啓輔から初めてもらうプレゼントなんだから。それがたとえどんな物でも嬉しかったに違いない。
こんなに無理しなくてもよかったのに。時計に込められた啓輔の思いが胸に詰まる。
「ありがとう。大事にするね」

『最終目的まで持っていけ』と岩さんは言っていたけど、目の前で時計を見て目を潤ませてくれている聡美さんにそんな無粋なこと言えるわけがない。

聡美さんが喜んでくれれば満足だった。これ以上何を望もうと言うんだ。

『半年も待たされたら、焦れるだろ』

またしても岩さんの言葉が頭に響く。俺が良かったとしても、聡美さんはどうなんだろう。好きならば結ばれるべきなのか？俺だけじゃなくて聡美さんも望んでいるんだろうか。

「聡美さん、俺、こんなだからさ、なかなかデートにも誘えないし、二人でいる時もいつも緊張しちゃってロクに触れ合うこともできなくて、自分で自分が情けなくなる事が多いんだ」

唐突に話し始めた俺を聡美さんはキョトンとした顔で見つめた。そりゃそうだろう。俺自身なんで今こんなことを話し始めたのか解らないんだから。

「もしかしたら、今までに聡美さんともっと親密になれるチャンスがあったのかもしれない。そのせいで聡美さんにもどかしい思いをさせてしまったのかもしれない。でもね、これだけは解って欲しい。俺だってホントは聡美さんともっと親密になりたいし、人並みに欲求もあるんだ」

「それって―」聡美さんは目を丸くしたかと思うと、顔を近づけて耳打ちするように「・・・エッチしたいって事？」と訊いた。

はっきり答えるのが恥ずかしくてゆっくりと首肯すると、聡美さんは珍しいものでも発見したかのように「へぇ・・・」と間延びした声を出して頷いた。
「そっか、ちょっと安心した。啓輔もちゃんとそういう欲求があるんだね」
「ごめんね。ちゃんと言えればいいんだけど、なかなか言い出せなくて。だからもう少し待っててくれないかな。その、ちゃんと俺から言えるまで」
自分の言っている事が情けなくて、申し訳なさも手伝って、最後の方はほとんど小声になっていた。聡美さんはええ？と大げさにのけぞり、どうしようかな、と意地悪く笑う。
やがて黙って見つめていた俺に、いつもの優しいほほ笑みを見せて「いいよ」と言った。

俺は聡美さんの「いいよ」が大好きだった。なぜならそれは聡美さんが俺を認めてくれた証だから。俺という人間を認めて、一緒に歩いてくれると約束してくれた証だからだ。

「でも」聡美さんは人差し指を向けて「あんまり遅いと、味が落ちるかもよ？」と一言付け加えた。

「そんなことないと思うけど、じゃぁ、あんまり遅くならないうちにね」
よろしい、と聡美さんが笑うと、テーブルの上でグラスの中のワインがゆらゆらと揺れた。店内の照明を反射した赤い液体は鮮やかに輝いて見えた。

聡美と真理

「どうだった？」
あたしの顔を見るなり真理はグイっと顔を近づけ、目を輝かせた。
「うん。楽しかったよ」
あたしはあくまで穏やかに、書類の整理をしながら淡々と答える。
「何？その満足げな顔。良い事あったんだ、プレゼントもらえた？」
「良い事、あったよ」
左手には啓輔にもらった時計がはめられているが、袖に隠れているので真理からは見えない。あたしは顔を上げて、真理の目を見ながらニヤリと笑う。教えてやるもんか。これは啓輔の気持ちそのものだから。

「なんだよ、幸せそうな顔しちゃって」
「悪い？」
「いいや、なんか若く見えるよ、聡美」
「それって、嫌味？」
狭い室内に真理の笑い声が響く。長年の親友は、聞こえるか聞こえないかの声でポツリと、良かったと零した。

啓輔と拓実

「どうだった？おい」
ビルの入り口を開けると、ロビーで待ち構えていた岩さんに声をかけられた。どうしても結果が気になるらしい。
「ああ、うん。楽しかったよ。聡美さんも喜んでくれたみたいだったし」
俺は努めて冷静に、岩さんを落胆させないように答える。
「そうじゃねぇよ、やったのか？やってないのか？」
やっぱり気になるのはその一点のみらしい。岩さんらしいと言えば、それまでなんだけど。
「岩さんらしく言うなら、やっては、いない」
「なんだよー」
岩さんは大げさに上半身をのけぞらせて、嘘だろー、と嘆いた。
「あんだけレクチャーしてやったのにダメだったのか？聡美はそんなに身持ちが堅いのか？」
「そうじゃないよ。岩さんのおかげでデートは大成功だった。すごく楽しかったよ」
岩さんの気持ちに感謝を示して、一応これだけは言っておく。だけど、最終目的については、俺と岩さんでは考え方が違うのは仕方がない。
「岩さんには悪いけど、俺たちはこれで良いんだよ」

啓輔と知美

なじみの椅子に座り、パソコンの電源を入れると、入口のドアが開いて篠原さんが出勤してきた。ここ数日の落胆ぶりが嘘のように明るい顔をしている。

篠原さんは聡美さんとの挨拶もそこそこに、俺の前に走り寄って、先輩！と跳ねた声を出した。

「三浦くんの意識が戻ったんです」

篠原さんは、あの事件以来、一週間以上意識不明だった三浦さんが、昨日意識を取り戻したのだと話した。その顔は今まで見た篠原さんのどの笑顔よりも輝いていた。

「わたし、ようやく三浦くんに謝れたんです」

「そう、三浦さんはなんて？」

「『篠原が無事でよかった』って。一言だけ言ってまた寝ちゃいました」

「良かったね」

「はい」

篠原さんは眩しい笑顔を見せる。彼女自身の本来の明るさを、今まで落ち込んでいた分まで取り戻しているかのようだ。

拓実と知美

「悪かったな、トモちゃんにあんなこと頼んで」

お昼休み、コンビニに向かう途中で岩崎は手を合わせて謝った。

「あの事ですか？いいんですよ。わたしもいつか聡美さんに話さな

きゃいけないと思ってたんですから。ちゃんと話せて良かったんだと思います」
「そう言ってもらえると、助かるよ」
「―で？」
知美は好奇心に満ちた目を岩崎に向けると「どうでした？あの二人は」と小声で訊く。

「トモちゃんにまで手伝ってもらっておいてなんだけど、またダメだったみたいだ」
岩崎が落胆を滲ませてそう言うと、予想に反して知美はまるで子供のように軽快に笑った。
「やっぱりですか。そうじゃないかと思ったんです」
「どう思うよ、あいつら」
「わたしはいいと思います」知美は白い歯を見せる。
「先輩は今時珍しいくらい奥手だし、純情で、はたから見てると展開が遅くてやきもきするけど、そんな先輩に愛されてる聡美さんは幸せだと思いますよ。きっと聡美さんも満足してると思います」
「嘘」岩崎には信じられなかった。「体を求めなくても？」
「そういうのが必要ない関係もあるんですよ、きっと」
「マジかよ」
「マジです」

そして聡美と啓輔

気がつけば、週が明けたら今まで通りのパレット戻っている。
拓実はいつものように椅子に寄りかかってパソコンとにらめっこ

しながら周りにちょっかい出してるし
知美はこないだまでの暗い雰囲気が嘘のように電話口で明るい声を出している。
真理は性懲りもなくメガネの奥で瞳を光らせて何かを考えているようだし
悟は相変わらず仏頂面でデザイン画と向き合っている。
そして啓輔が叩くキーボードの音が室内に響き渡る。相変わらず誰よりも早くて、心地良い。

先週までとは大違いだ。皆の声が室内を走り回ってオフィス全体が明るく感じる

改めて思う。あたしはやっぱりこのオフィスが好きだ。
おせっかいだけど皆の事を第一に考えてくれる拓実。
一時疑ったりもしたけど誰よりも明るくてかわいい知美。
付き合いが長い分互いになんでも知ってる真理。
いつも仏頂面しながら冷静に周りを観察してるけどホントは誰より優しい悟。
そして――

「聡美さん、まだ帰らないの？」
午後8時。誰もいなくなった室内でパソコンの電源を落とした啓輔が背もたれに寄りかかりながら訊ねる。
「そろそろあたしも終わりだよ」
あたしは皆からもらった仕事の見積もりをエクセルに入力して、書類に承認印を押す。これで今日の仕事は終わり。
両手を突き上げて伸びをすると左手の袖の隙間から赤いベルトが見えた。ピンクの文字盤の上で小さな針が動いている。そっと触ると自然と顔がほころんでしまう。

「そっちは大丈夫？」
「オッケー、ちゃんと閉まってるよ」
「じゃあ、消すね」
戸締りを確認して、明かりを落とす。

ドアを開けて外に出ると少し肌寒い。あたしはコートの前を閉じて、玄関に鍵をかけた。
「久しぶりだね、聡美さんと帰りが一緒になるの」
後ろから啓輔の声がする。あたしは振り返って「それは」と指を向けた。
「それは、啓輔がずっと知美と一緒にいたからだよ」
じっと睨んでやる。あたしはずっとやきもちやいてたんだぞ、と。
「それは・・・ゴメン」
啓輔は申し訳なさそうに眉を下げた。なんでも真に受ける性格はからかい甲斐がある。

「いいよ」と言うと啓輔の顔に明るさが戻った。単純な奴。

なじみのレトロなエレベーターで1階に降りると、ロビーのガラス越しに正面の公園のオレンジの明かりがうっすら差し込んでいた。普段はこんなこと気付きもしないけど、明かりの落ちたロビーに広がるオレンジはとてもキレイに思えた。

「ねぇ啓輔」
「うん？」
名前を呼ぶとすぐに返事が返ってくる。近くにいるとやっぱり安心する。
今だから思う。独立してオフィスを立ち上げて良かった。啓輔と

出会えてよかった。

「せっかくだから二人で飲みに行こうか」

なんか気分が良いから、飲みに行ったついでにあたしからキスしてやろう。きっと啓輔は顔を真っ赤にして驚くだろうな。

久しぶりに聡美さんと一緒になると、飲みに誘われた。もちろん断るわけがない。

俺も同じことを考えていたんだから。

ビルを出て並んで歩く。公園の木々の間から差し込むオレンジの明かりに、隣を歩く聡美さんが左手につけた時計を大事そうに触るのが見えた。さっそくつけてくれたんだ。

「ねぇ聡美さん」

「うん？」

聡美さんはぼんやりと俺を見る。口元に浮かべられたほほ笑みがすごく優しくて思わず俺も顔がほころんでしまう。

「好きだよ」

ホントは何か違う事を言おうとしたんだけど、聡美さんの顔を見たら何とはなしに口から零れた。

聡美さんは一瞬眉を上げて、何言ってんの？と目をそらす。

だって、今の聡美さんすごくキレイだ。俺の好きの気持ちはいつ

も容量いっぱいですぐに零れてしまうんだよ。と言ったらきっと『バカ』って笑われるんだろうな。

今日は飲みに行ったついでに勇気を出して俺からキスしてみようかな。きっと聡美さんは目を丸くして驚くだろうな。

でも決めたんだ。聡美さんから来てくれるのを待つだけじゃなく俺からもちゃんと近づく努力をするんだと。

「こないだ聡美さんが言ってた神様の話さ」店に向かう途中、狭い路地を歩きながらこないだから気になっていた事を訊いてみる。どちらからともなく繋いだ手が暖かい。

「何？あれは忘れてよ」

「あれは聡美さんの妄想では、神様は最終的に俺達をどうしたかったの？」

聡美さんは、恥ずかしそうに笑って、「そんなの、決まってるよ」と言った。

それはまるでずっと昔から決定したいた事のように力強く俺の耳に届く。

「ハッピーエンド、だよ」

パレット（後書き）

聡美と啓輔のお話はこれにて一旦の閉幕となります。
彼らの物語は終わることなく、これからも続いていくことでしょうから
機会があれば、またその時に・・・

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

ｕｓｋ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4827w/

中央分離帯

2011年10月2日18時22分発行